

沖縄の神社、その歴史と独自性

加 治 順 人

KAJI Yorihiro

沖縄県護国神社宮司・沖縄国際大学非常勤講師

【要旨】 本稿では、琉球・沖縄の神社の歴史を概観して、その多面的な特徴を指摘する。

琉球・沖縄の神社神道の歴史とは、琉球・沖縄が日本と向き合ってきた歴史と軌を一にする。しかし、それは単に在来信仰が日本の宗教文化に包摂されたことを意味するのではない。日本からの文化的影響を受け、時に政策的に統制されながらも、さまざまな特例措置や独自の改変によって、沖縄特有の神社文化を形成してきた。

沖縄で最初の神社は、14世紀後半に創建されたと伝えられる。だが、おそらくそれ以前から沖縄では、日本の神道の考え方とよく似た信仰の形態を育み、その聖地である御嶽^{うたきまつ}を祀ってきた。だからこそ在来信仰と親和的な熊野信仰が琉球に根付くことになったのだろう。琉球王朝時代の官社「琉球八社」には、在来信仰と日本の神道が巧みに混合されている。薩摩の琉球侵攻、明治維新による琉球処分、日清戦争以後の日本の近代戦争、沖縄戦、アメリカによる占領期、本土復帰、と琉球・沖縄の近現代史はめまぐるしい変動にさらされた。だが、逆説的なことに、明治時代の改革、太平洋戦争、本土復帰、と「日本化」の風圧が特に強まった時期に、かえって民間信仰が正式に神社神道へ参入する道が拓かれてきたのである。その結果、沖縄では独自の神社文化が形成されたと筆者は考えている。

筆者は現役の神職で、沖縄県護国神社に勤めて22年になる。自身が職務を通じて経験したこと、関係者への聞き取り、現地調査での発見も「資料」として記述に活かした。そのほか、写真、古地図、慣習、建造物などの非文字資料も活用するよう努めている。

The Shrines in Okinawa: Their Histories and Unique Multi-Faceted Characteristics

Abstract : The aims of this paper are to provide an overview of the history of the Shinto shrines in Ryukyu/Okinawa, and to discuss their unique multi-faceted characteristics.

The history of shrines in Okinawa has been influenced by that of Japan-Ryukyu/Okinawa political relationships. However, it does not mean that Ryukyu/Okinawa's indigenous religious beliefs have been passively assimilated to the religious traditions of Japan. Okinawa has been indeed influenced by the Japanese culture, including its government policies. But, within Japan's sphere of influence, the Okinawans have developed their own unique shrine culture. Okinawa has benefited from reinterpreted and modified the Japanese government's preferential measures.

Though the first shrine in Okinawa was probably founded in the late 14th century, well before then its people had developed religious beliefs which were very similar to Shintoism of Japan.

Then the Ryukyu's Eight Shrines, the official shrines of the Ryukyu Dynasty, clearly blend together their own religious traditions and the Japanese Shinto, while keeping its uniqueness. Furthermore, during the periods of increasing pressure to "become Japanese" such as during the Meiji reforms, the Japan's modern wars since the Sino-Japanese war, and the reversion to Japan in 1972, Okinawa's indigenous religion found a way to formally merge into the system of the mainstream Shintoism of Japan, and allowed the Okinawan to develop a unique Shinto shrine culture in Okinawa.

The author is currently an active Shinto priest who has served at the Gokoku Shrine in Okinawa for 22 years. This paper draws on his personal experience as a Shinto priest, based on interviews with relevant parties, as well as discoveries made through fieldwork research. The author also attempted to elucidate the history of religion in Ryukyu/Okinawa, by including non-written materials such as photographs, old maps, architecture, and descriptions of traditional customs.

はじめに

郷里の沖縄で神主になって間もなく、「何かが違う」と思い始めた。

「ヒヌカンを仕立てたいが、どうしたらいいのか」

「正しい位牌の祀り方を教えてほしい」

「家の井戸を埋めたいのだが祟^{たた}りはないか」

大学で学んできた「神社の業務」とは異なった相談が頻繁に寄せられる。割合にすると約3割もある。ときどき境内で、ピンシーという沖縄流の「拝み」セットを持参した人が地面に座って拝んでいる。沖縄の人にとって神社はどういう場所なのか。神社に何を見ているのか。もしかすると、それは日本の神道における「神社」像とは異なるのではないか。そんな疑問が膨らんだ。

本稿の背景として、自己紹介から始めたい。

本土復帰前の1964年、私は那覇で生まれた。両親は沖縄県護国神社で働いていたが、神職の家ではない。父は神社というものがない竹富島の出身で、紆余曲折あって護国神社の事務局長を務めていた。今でこそ大きな神社だが、復帰前は参拝者も職員も少ない。私は物心つく頃から家族総出で神社を手伝い、毎週末を境内で過ごした。私にとって神社とは、身近でよく知る場所のはずだった。

大学進学で東京に出て、卒業後は地元銀行に就職、一時は大阪支店で勤務した。30歳で神社を手伝う決意をして皇学館大学専攻科へ進んだので、内地での生活経験が8年ある。沖縄の神社と内地の神社では、外観も歴史もずいぶん違うのは知っていたが、日本全国から集まる学生たちと同じ課程を履修して神職になった。

ところが、いざ沖縄に帰って神社で奉職し始めてみると、思ってもみなかった相談や依頼を受ける。しどろもどろに対応するものの、相手がみるみる失望していくのが分かった。父である事務局長や内地出身の神職は、この手の相談や依頼を迷信と一蹴して相手にしなかった。案件を一手に引き受けたのは、当時の宮司・又吉眞興^{しんこう}である。

又吉宮司は往年の二枚目俳優・上原謙のような美貌で、「ユタ上がり」だった。もともと神懸^{カミダリー}かりをする人ながら公務員を務め、神職資格を取った後は複数の神社を手伝うフリーの神職となっていた



写真1 護国神社の拝殿前にて、黒い沖縄線香・紙銭・酒・かるかん饅頭などを並べて拝んでいた様子を撮影させてもらった。

のを、私の父が声を掛けて宮司に迎えたそうだ。私は又吉宮司が対応するのを見習い、井戸^{はら}祓いや屋敷祓いのお供をし、民間信仰の発想や方法を学んだ。依頼者が安心して喜ぶのを見て、こうした沖縄らしい依頼に応えることもまた沖縄の神主の仕事ではないかと思うようになった。

沖縄の神社とは何か。そんな疑問がいよいよ膨らんだ2年目、沖縄国際大学が大学院を新設することを知り、修士課程に入って民俗学を学ぶことにした。当時の学長は平敷^{へしきよしはる}令治先生で、御嶽と位牌の専門家である。直接、授業で教えるを受ける機会にも恵まれた。修了後は、母校で週に1度の非常勤講師として「沖縄の宗教」という講義を担当しつつ、本業の神職を務めてきた。私の神社研究は、本務を理解するために必要なものでもあり、逆に本務で出会った事例を取り入れて考える場でもある。

「沖縄の神社」とは何か。それは「御嶽としての神社」ではないか、と私は考えている。

本稿では、神道が伝来した近世から現代に至るまでの「沖縄の神社」の歴史を記述する。日本からきた神道が沖縄の在来信仰を侵蝕したという理解は正しくない。神社神道はいつのまにか沖縄へ輸入され、独自の解釈によって取り入れられ、在来信仰と影響しあって発展してきた。「沖縄の神社」史は、沖縄の近現代史そのものである。琉球王朝時代、薩摩の琉球侵攻、明治維新、日本の近代戦争、沖縄戦とアメリカ統治下、本土復帰、と沖縄の政治と社会が大きく変動するたびに神社神道と御嶽信仰の関わりは変化し、現在の「沖縄の神社」を形成してきた。今もなお在来信仰と融合した「沖縄の神社」とは、独自の形を得た信仰であると言える。

いささか学術論文らしからぬ本稿は、文字に残された文献資料のみならず非文字資料を活用する試論である。写真、古地図、聞き取り、現地調査、慣習、建造物、そして私自身の経験といった「資料」からも「沖縄の神社」史を読み取って文字化しようと試みた。平穏な日常に溶け込んだ信仰を、おそらく人はわざわざ記述しない。本質的に文字資料から捉えがたい信仰というものを捉える手段と

は何か、学術性をどう担保できるのか、試行錯誤しながらの現場レポートである。

I 琉球・沖縄の神社と御嶽

(1) 沖縄の神社の特徴

2018年現在、沖縄県内には宗教法人として登録された神社が13社ある。しかし、登録されていない「神社」や、それらしく鳥居や拝殿などを備えて「お宮」と呼ばれる場所を合わせると、いくつあるのか正確な数は分からない。規模や運営状態から分類すると、以下のように大別できる。

- ① 一通りの施設が整い、常勤の神職が奉仕（波上宮・普天満宮・沖宮・天久宮・護国神社など）
- ② 施設はあるが常勤の神職はおらず、他社の神職が兼任（末吉宮・識名宮・八幡宮など）
- ③ 境内地はあるが小祠^{しょうし}だけが建ち、他社の神職が兼務（沖縄神社）
- ④ 境内地がなく、他社の境内にご神体が安置（浮島神社・世持神社）
- ⑤ 古来の拝所が神社の様式を整えた「神社」「お宮」（つきしろの宮・白銀堂・名護城神社など）

この5番目は「御嶽の神社化」と呼ばれる、沖縄ならではの「神社」であろう。

御嶽とは沖縄の在来信仰における聖域で、地域ごとに存在する。そこに神が鎮まり、あるいは降臨して集落を守護すると信じられてきた。集落のなかに後から御嶽を定めたのではなく、まず清浄な場所を御嶽とし、周辺に集落が形成されたとされるが、いつどのように始まったか確かな記録はない。本来どの集落にも必ず御嶽があったと言われる。

御嶽と日本の神社とは根幹を同じくするとして、「古神道」と呼ばれる。^{いにしえ}古の神道においては、まず清浄に感じられる地を定め、神が降臨する樹木や岩石を臨時で設けて、そこに神霊を迎えて祭りを行った。^{ひもろぎ いわさか}神籬や磐境である。やがて、祭場を守るための覆い屋などが設けられるようになり、祭りの後も据え置かれ、次第に堅固な建物へと変化して神社となったと考えられている。沖縄の御嶽は、この神籬や磐境の段階を今も留めたものである。

沖縄でも一般に神社とは、境内に本殿・拝殿・参道・手水舎・社務所・玉垣・鳥居などが整えられたものを指し、^{ほこら}香炉や祠しか置かれていない御嶽とは区別して理解される。しかし、上記③や④のように境内地が完備されていない神社もあるし、御嶽が神社の形をしていたり神社に御嶽の要素を留めていたりする「神社」も多く見られる。

こうした様式の混在は、沖縄の神社の成立過程と変遷史に関わる。沖縄の場合、神道は外来宗教として受け容れられ、政治的・文化的な要因が作用して変遷した。創建時期で分類すると、15世紀中頃から16世紀にかけての琉球王国時代と、明治から昭和初期にかけての近代に多い。琉球王国時代は王府のための外来信仰として。近代においては、在来信仰と混じりあいながら広く民衆の信仰として。沖縄にとっての神社・神道とは、「日本との関係」そのものであった。

(2) 琉球八社の特徴

神社伝来の第一期にあたる15世紀半ばから16世紀にかけては、琉球最初の統一王朝であった第一尚氏から第二尚氏へと王統が移り（1469年）、琉球文化が栄え始めた黄金時代である。政治的には中

中央集権化が整い、経済的には日本・中国・東南アジアとの広い交易で栄えた。この豊かな王国時代に創建され、「官社」として王府の保護を受けた八つの神社は特別に「琉球八社」と呼ばれる⁽¹⁾。「沖縄の神社」の原型と言える。

表1 琉球八社一覧⁽²⁾

	創建	祭神	鎮座地	立地	併設寺院	
波上宮	1368～84 年頃?	熊野三神	那覇	海岸・洞窟	護国寺(真言)	波上山三所権現
沖宮	1451 年頃?	熊野三神	那覇	那覇港埠頭	臨海寺(真言)	沖山三所大権現
末吉宮	1457 年頃?	熊野三神	首里	小高い山	万寿寺(真言)	大慶山権現
安里八幡宮	1466 年	八幡神	真和志	丘陵地	神徳寺(真言)	八幡大菩薩
天久宮	1466 年頃?	熊野三神	真和志	海岸・洞窟	聖現寺(真言)	天久山大権現
金武宮	1527～57 年頃?	熊野三神	金武	洞窟	観音寺(真言)	金峰山三所大権現
識名宮	1556～72 年頃?	熊野三神	真和志	洞窟	神応寺(真言)	姑射山大権現
普天間宮	1590 年以前	熊野三神	普天間	鍾乳洞内	神宮寺(真言)	普天満山三所大権現

王国時代に創建された神社はこの8社のほか、長寿宮(壺宝山長寿寺天照大神)、照太寺(浮亀山照太禪寺・天照大神)、真壁神社、宮古権現堂、八重山権現堂などがある。だが、王府の俸禄^{ほうろく}を受けていた琉球八社は別格だった。これらに共通した特徴からは、沖縄の神社の性質が浮かび上がる。

① 創建時期と鎮座地

琉球八社の鎮座地を見ると、普天間宮(現・普天満宮)と金武宮のほかは首里と那覇にある。首里は王府がある政治の中心地であった。那覇は港を中心に栄えた経済の中心地で、中国からの渡来人や日本人商人も居住する、交易の表玄関であり文化の入り口でもあった。

当時、琉球は中国と冊封制度と呼ばれる従属関係を結んで庇護を受け、朝貢貿易により莫大な富を得ていた。朝鮮、東南アジア諸国とも活発な貿易を行い、東アジアの交易の中継基地として発展した。日本も交易相手のひとつで、中国や東南アジアから入った物品を日本へ販売し、日本からの工芸品を中国・東南アジアへ販売した。そのため、日本からも多くの商人が琉球を訪れた。特に博多商人は、琉球を拠点とした交易で活躍したと伝えられる。

日本から伝来した文化には、当時の日本で流行していた新しい信仰が含まれていた。熊野信仰をはじめとする神社神道や、真言宗などの仏教である。

古来、沖縄では神は海の彼方から来訪するものと考えられてきた。そのためか、日本の商人や僧侶が伝えた新しい信仰は従来の神々より強い力を持つと思われたらしい。まず王家や王府役人らに信仰され、当時の豊かな富により新しい神を祀る施設が次々と設立され、王府によって保護された。だから、最初期の神社は首里・那覇に集まる。それは広く民衆に開かれた信仰ではなく、王侯貴族が外来の神の恩恵を受けようとした支配層の宗教であった。

表1からは、14、5世紀頃に那覇・首里・真和志(現・那覇市)の神社が創建され、城や港から離れた金武や普天間への創建時期は16世紀と遅いことが分かる。時代が下るにつれ、王府や裕福な商人に定着した宗教文化が次第に地方へと伝播し、沖縄本島の南部へ、あるいは金武などの中部へ、さらに離島へと広がっていったのである。

② 神仏習合と熊野信仰

神社信仰がいつどのように琉球に伝えられ、最初の神社がどこだったのか、確かな記録はない。ただ、当時の神道が神仏習合だったことを考慮すると、おそらく波上宮だろうと推測できる。神仏習合とは、目に見えない神の本体は仏という仮の（＝権）姿を現すとする「権現信仰」に基づいている。そのため近代に神仏分離が行われるまで、神社と仏閣は一体となって発展してきた。

『琉球神道記』⁽³⁾によると、波上宮はもともと真言宗護国寺の鎮守社であったと伝えられる。護国寺の創建は、察度王の時代（1371～1395年）に日本僧の頼重法印が開山したとされ、頼重法印は1384年に入滅したと伝わる。ということは、護国寺と波上宮の創建は1371年から1384年の間と推測できる。その後、補陀落渡海僧^{ふだらくとかい}として漂着した日秀上人（1503～1577年）が波上宮の「再建」をした、と中国側の記録や『おもろさうし』の歌などにある。波上宮だけでなく、琉球八社のすべてが境内地に真言宗の寺院を併設し、熊野信仰と同時に権現や菩薩を祀っていた。日本の多くの地域と同じように、神社と寺院が同時に創建されたか、寺院に神社が併存するようになったものと推測される。

こうして琉球八社は、神社・寺院を併設したうえで王府直轄の「官社」として扱われた。王府の繁栄・豊穡・航海安全などを祈願する場となり、長く神道が一般庶民の間にまで広まることはなかった。やがて明治維新と同時に、日本では神仏分離が強力に推進され、地域によっては激しい廃仏毀釈の嵐が吹き荒れて寺院や仏像が破壊された。だが沖縄には明治の各種改革が及ぶまでにかなりの時差があり、廃仏毀釈の影響をまったく受けなかった。そのため、琉球八社だった波上宮と普天満宮にはそれぞれ、護国寺と神宮寺が今も隣接して建っている（写真2）。



写真2 神宮寺境内にて。左が神宮寺の本殿、右奥が普天満宮の社務所。境内地が隣接していることが分かる。

③ 熊野信仰

琉球八社のほとんどが熊野三神を祀っている。熊野三山（熊野本宮大社・熊野速玉大社・熊野那智大社）が主祭神として祀る三神（三所権現）で、家都美御子神（スサノオ＝阿弥陀如来）・熊野速玉男神（イザナギ＝薬師如来）・熊野牟須美神（イザナミ＝千手観音）である。

なぜ沖縄で熊野信仰だったのか。

熊野信仰は奈良時代に起こったとされる、修験道を介して自然神信仰と密教がひとつになった信仰である。熊野比丘・比丘尼・修験者らによって全国に熊野信仰が広められた。熊野の地は平安初期にはすでに朝廷からも敬われ、907年の宇多法皇の熊野御幸に始まり、平安後期から鎌倉時代初期にかけては「蟻の熊野詣で」と言い表されるほど皇族から一般庶民まで広く流行した。同じ時期の琉球には、若狭村に日本人町ができるほど多くの日本人が滞在していた。京都・堺・博多・鹿児島などから来た商人や船乗りらが、流行の熊野信仰を伝えたのが始まりになった可能性は高い。

あるいは、仏教を伝えたと言われる補陀落渡海船の影響だろうか。古来、熊野は異界との接点とされ、海のはるか南には補陀落山、つまり観音浄土があると考えられた。そこで、海沿いの補陀落山寺などから浄土へ向け、箱状の小舟に僧侶を密閉して流す補陀落渡海という習慣が起こった。多くは海に沈んだが、一部の舟は琉球へ漂着した。13世紀の中頃に初めて琉球に仏教を伝えたと言われる禅鑑も、那覇に漂着した渡海僧であったと伝わる。そして、補陀落山寺の記録によれば、渡海船の上には四方に鳥居が建てられていた。神仏習合を背景に、渡海僧が仏教とともに神道としての熊野信仰を琉球に伝えた可能性もある。

同じ頃、琉球には熊野のほかにも日本の神が伝えられた。例えば、琉球八社のひとつである安里八幡宮（1466年）は八幡神、同時期に建立された浮島神社（1452年）は天照大神を祀る。だが、王府により社が創建されたものの、八幡信仰や伊勢信仰が広く一般にまで広まることはなかった。天満宮、御伊勢堂なども存在していたが、官社にすらならなかった。なぜ熊野信仰だけが定着したのか。それは琉球の信仰との類似点が多かったからではないだろうか。

琉球では古くから「ニライカナイ」と呼ばれる異世界を想定してきた。このニライカナイと熊野の浄土は、「海の彼方において神々が住み、死者が赴く永遠の浄土」という内容が共通する。琉球の人々にとって、熊野の神は自分たちが信仰してきた神と同質なものと感じられたのかもしれない。武士を守護する八幡の神や、皇室の祖先神である伊勢の神は、琉球の人にとって異質である。

このことは創建にまつわる記録の有無からも裏付けられる。波上宮や普天間宮など熊野の神を祀る神社では、創建年や創建者についての記録はない。他方、同時期に設立された安里八幡宮や浮島神社は、それぞれの創建年や創建目的が文献から確認できる。安里八幡宮は1466年、尚徳による喜界島遠征の戦捷祈願がなされて建てられた。浮島神社は長虹堤（浮き島だった那覇と首里とを結ぶ道）が完成した1452年、竣工祈願をした天照大神を祭神として建てられた。これら二社とも、明確な目的があって神が勧請され、目的が達成された後に、所縁の地に社が設立された。⁽⁴⁾

熊野三神を祀る神社はいずれも設立年が不明で、創建目的も「国家守護」など漠然としている。神託によって創建されたとする伝承も多い。おそらく日常に溶け込んだ信仰は記録されない。記録の「不在」こそ、熊野三神が琉球の神と同一視された証拠だと思われる。

④ 洞窟信仰

琉球八社は立地にも共通点がある。海と洞窟である。

波上宮は海に面した崖の上に建つが、崖の中ほどには洞窟がある。洞窟からは発掘調査によって人骨と土器片が発見され、沖縄貝塚時代後期の埋葬地の遺跡と言われている。また、波上宮の西側には今も御嶽が存在する。つまり、古来の聖地を選んで、後から神社が創建されたのだろう。普天満宮の起源も、洞窟に琉球古神道の神を祀ったことに始まる。社殿ができる以前から地域での信仰を集めた洞窟だったと思われる。

例外としては、沖宮が港に続く海沿いにあり、末吉宮が首里の山間部に神託で開かれた。尚徳王が喜界島平定の感謝の証に創建した八幡宮は、城から港へ向かう途上に位置したと思われる。だが、それ以外の社のほとんどは、共通して洞窟を中心に建立されている。

洞窟は、沖縄では異界の出入り口とされてきた。沖縄の洞窟研究の第一人者でもある普天満宮宮司・新垣義夫によると、沖縄本島には確認できただけでも 800 もの洞窟があり、うち 600 の洞窟に入ったことがあるという。沖縄の洞窟は鍾乳洞が多い。鍾乳洞はもともと水の通り道なので、海まで続く数キロにわたる長いものもある。そのためか、沖縄では古来、太陽は西の海に沈んだ後、洞窟を通過して東側へ移動し、また生まれ変わって海から上ると考えられた。洞窟は太陽の死後の世界で、同時に再生をつかさどる場所とされた。同じように、人にとっても死と再生の聖地と類推されたようだ。

縄文時代にはすでに住居用の洞窟と埋葬用の洞窟とに分けて使用されていた形跡があるという。当時は死者を地中に埋葬するのではなく、西の海に面した斜面の洞窟に置いて風葬とした。これら風葬地に用いられた洞窟はやがて神聖な場所として畏れられ、多くは御嶽となり、一部は後に神社を勧請する地として選ばれた。

つまり、沖縄の神社の多くが洞窟の近くに設立されたことは、神社が古い信仰の延長線上に取り入れられたことを示している。

(3) 薩摩の侵攻と琉球の信仰

このように、近世の神社は古神道の特徴が強いものであった。神仏が習合したうえに、御嶽と神社が習合したものだったことが分かる。神社の形を取りながらも、琉球独自のカミ概念で解釈され、王府に庇護され、本土とは性質の異なる「信仰の場」として発展してきた。

1609 年、薩摩の島津軍 3000 名が琉球に侵攻した。またたく間に琉球を降伏させ、尚寧王をはじめとする家臣ら総勢 100 名を島津に連行した。1611 年 8 月、ようやく 2 年の抑留生活を経て帰国を許した際、「掟十五条」という島津氏の定めた 15 ヶ条の法度に背かぬ旨の起請文を提出させた。

この掟十五条の起請文には、当時の慣習に則り、牛王^{ごほう}と呼ばれた料紙が用いられた。誓約を破ると神仏の罰を被る、熊野の神の呪詛^{じゅそ}が掛かっていると考えられた紙である。以後、国王・摂政・三司官が新たに就任するごとに、この起請文を提出させられた。場所は波上宮の別当寺であった護国寺で署名させられた。つまり薩摩が琉球を政治的・経済的に支配した体制は、熊野の神仏に誓約する起請文によって宗教的に呪縛されていたことになる。

この 15 ヶ条には宗教政策も含まれる。第 5 条「諸寺を多く建てること」が禁じられていた。寺の建立を制限した第 5 条が、神社の建立とどのような関係にあったのか、明らかにする資料を私はまだ

見つけられていない。ただ、当時の神仏習合の状況からすれば、神社の建立もやはり制限されたのではないかと推測される。

薩摩は奄美を直轄領としたが、沖縄本島以南は琉球王国を存続させた。沖縄本島は特に厳しい支配と監視を受けたとされるが、文化的な同化が強制されることはなかった。薩摩の狙いは中国との交易によって得られる利益だったからである。中国に対しては、琉球と薩摩との関係を隠して、琉球を独立国と見せ続ける必要があった。逆に幕府に対しては、琉球が「外国」らしくあることは薩摩の威信を表すと考えられた。将軍や琉球国王が代替わりする際には「江戸上り」あるいは「江戸立ち」といって、琉球の使者が薩摩藩主にとりかわられて江戸へ挨拶に出向くことになっていたが、道中では中国風の衣装を身にまとい路次楽（中国伝来の道中楽）を演奏させた。異国風の行列は沿道の人々に大人気で、1800年代の江戸では琉球ブームが生じた。葛飾北斎も「富嶽三十六景」と同時期に「琉球八景」を描いており、寺（三重城の臨海寺、奥武山の龍洞寺）、御嶽（城岳の王樋川）のほか、神社（波上宮）が描かれている。⁽⁵⁾

これらの「名所」は、1603年からの3年間を琉球に滞在して当時の神道や文化について記録した袋中の『琉球神道記』（1605年頃）と変わらない。王国時代には次々と神社が建立されたにもかかわらず、薩摩の支配が敷かれて以後、新しく建立された記録はない。やはり掟十五条の「諸寺」には神社も含まれて建立が制限されたと推測できる。琉球に日本らしい文化が広がることを薩摩は歓迎しなかったとすれば、薩摩侵攻により琉球の神道は一時停止されたのだろう。逆説的なことだが、薩摩支配下において、日本型の神社が広く民衆の信仰を集めることはなかった。民衆の信仰は、特段の施設を必要としない御嶽へと向けられたままであった。

薩摩による宗教政策には、人事も含まれる。以後、神職は士族から取り立てていくよう定められた。社家であった康姓の家譜によれば、1635年、波上宮の火災により天願筑登之親雲上権明が権現勧請のため鹿児島へ赴き、諏訪神社の佐藤権大夫信年から「神道の法を悉く伝受」されて、秘書・立烏帽子・浄衣を賜って帰国したと記録される。⁽⁶⁾ 学んだ祭式と神楽は、琉球に戻って他の七社の神職にも伝えられ、それ以後、王府より康姓を賜り、筆頭の社家として明治末期まで神職を務めてきた、とされる。

この時に初めて琉球に正式な神道の作法が伝えられたことになる。以後、琉球の神社でも神楽が奉納されるようになり、本土と同じような祭典が行われるようになった。また、康氏の始祖の玄孫にあたる智安が6度にわたり薩摩で祭式・作法・神楽・奏楽を学んで許状をもらって神職となり、利姓として新たな家譜を賜った。神職として取り立てられた5つの社家（康・利・薛・樂・達）がいずれも中国名であるのは、彼らが士族であることを示す。

だが、この諏訪神社とはいったいどこか。信濃国一之宮である諏訪大社を勧請した社に違いなく、現在も鹿児島県内にある複数の諏訪神社のいずれかと思われるが、現段階では特定できなかった。神社庁に所属する神社で該当する諏訪神社はない。インターネットの神社案内サイトやグーグルマップでしつこく探索したが、鹿児島県内の諏訪神社はいずれも小さな社である。その諏訪神社だったのはなぜか。そもそも権現を勧請するために赴くのが、なぜ熊野神社ではなく諏訪神社だったのか。腑に落ちないことばかりだが、事情をつまびらかにする記録は管見の限り見つけられなかった。

ただ、神職を務める身から言えば、一度の訪問で「神道の法を悉く学ぶ」ことなど不可能である。

一人前の神職を養成するには相当な時間がかかる。口伝で教わる部分も多く、祭式・作法も複雑かつ多岐にわたるため、長い修行と見習い期間が必要になる。現代なら、一人前になった後でも折々に研修を受けて正しい手順や作法を確認する。短期の滞在と「秘書」で習得できるわけではない。

当時の琉球の神職はおそらく、薩摩の神社で修行したことを正統性と権威の根拠として利用したのだろう。日本の神社神道とは異なる独自の儀式が綿々に行われていた可能性もある。

実際、薩摩から本土の神社のあり方を学んでも、琉球の神社は「御嶽」的な要素を色濃く残し続けた。私社である住吉、箕ノ隅、御伊勢堂のほか、識名、天久にも香炉が設置されていた記録がある。つまり、官社レベルの神社となっても変わらず拝所の機能を残していたことを意味する。

全体的に、この時期の影響については詳しいことは分かっていない。少なくとも沖縄においては、神社全体や各神社にも、薩摩の影響について書かれた記録はないのである。

II 神社神道の近代化

(1) 明治維新と沖縄県

沖縄の神社史が大きく変動するのは明治時代に入ってからだ。

江戸時代末期から明治中期にかけて、日本は急速な近代化を進めたが、琉球にこれらの改革が波及するまでには少々の時間差がある。1871年まで、琉球王国は存続していた。翌年、明治政府は鹿児島県を通じて初めて琉球に入朝を促す。時の尚泰を琉球藩王として華族に列する旨を通達し、1873年、これまで薩摩藩（鹿児島県）管轄だった「琉球藩」は外務省の管轄となり、翌年、内務省へと移管。1879年3月27日、廃藩置県が行われた。いわゆる琉球処分である。首里城を明け渡した尚泰は退位して上京し、琉球国は廃絶となって沖縄県が新設された。

しかし、本土の廃藩置県（1871年）に8年遅れて県政が始まったものの、実際には旧慣温存策が執られた。中国を宗主国と考える琉球復国運動が無視できない勢力だったからである。明治政府の沖縄政策に反発した士族層や中国系住民のなかには、琉球国の復活を目指して清国へ密航して渡り、清国皇帝に琉球の情勢を訴えて救援を願い出る者もあった。旧体制で強い影響力を持っていた久米村の中国系住民による琉球復国運動は特に盛んに展開された。

「琉球」から「日本の沖縄県」への転換期は、日清戦争（1895年）だった。琉球復国運動はこれを好機と捉えた。後年「沖縄学の父」と呼ばれた伊波普猷は当時まだ旧制中学4年生で、「首里^{みひら}三平等の頑固党（復国運動の支持者）の連中は、毎月、朔日と15日には、百人御物参^{ももぞおもものまいり}といって、古琉球の大礼服をつけて、弁ヶ嶽、円覚寺、弁才天、園比屋武嶽、観音堂等に参詣し、旧藩王尚泰の健康と支那の勝利とを祈った」（伊波 1975：367）と回想する。日本撃退を祈願して中国服で寺や御嶽へ参るとは興味深い。

人々にとって日清戦争は、「琉球国」に戻るか「沖縄県」になるか、将来を左右する分岐点と見えただろう。結局、日本が勝利して台湾まで領有したのを見て、人心は一変した。中国の武力介入による琉球復国運動は瓦解し、旧士族層の運動もみるみるうちに収束に向かった。

沖縄県は急速に日本化を始める。内部からの同化志向も急速に強まった。地方や離島にいたるまで就学率が大きく向上し、「風俗改良」が進んだ。男子は断髪、女子は琉装から和装を着るような

り、入れ墨や毛遊び（中世日本の歌垣に似た男女の交流）が取り締まれ、行事の簡素化が進んだ。沖縄で初めての新聞『琉球新報』の活動で「中央」の情報が入りやすくなった影響も大きい。

制度改革も急速に進む。政治・経済的には、1903年に土地整理事業が完了したことによって24年遅れで日本化が始まった。軍事的には、日本ではすでに1873年に太政官布告として制定された徴兵令は、1883年の改正で沖縄県も徴兵区域とされたにもかかわらず実際の徴兵は保留されていたが、ついに1898年、沖縄でも施行された。

だが、文化・宗教的な改革は、より緩やかに進行した。明治日本の宗教改革は、早くも1868年に始まった「神仏判然令」による。神祇省を設けて国家神道を確立する政策により、各地で神社と仏寺との争いが起こって廃仏毀釈が生じた。だが、この運動も沖縄に波及しなかった。神仏習合は、まだしばらく維持されたのである。決定的な変化は、波上宮の官幣小社列格（1890年）と、社寺への禄の支給廃止（1910年）がもたらすことになる。

（2）官幣小社・波上宮

1890年1月20日付で、波上宮は官幣小社に列せられた。官幣社とは、新嘗祭にいなめさいと例祭に帝室費から幣饌料へいせんりょうが拠出される格の高い社である。

日本の一県となった沖縄には社格をもつ神社がなかったため、沖縄県知事から官国幣社を設置するよう上申されていた。「一般尊王愛国ノ気風ヲ振興セシメ施政上必要ノ事」とされ、北海道の札幌神社(7)の例にならい、当時もっとも規模の大きかった波上宮が選ばれた。以後、波上宮は沖縄の神社仏閣のなかで別格の存在となった。

この実現に向けて働きかけたのは、1888年に沖縄県知事として赴任してきた丸岡莞爾である。丸岡は沖縄県知事に就任する以前は、内務省社寺局長と造神宮支庁副使を務めた人物である。赴任早々、官幣社の設立を喫緊の課題と定めた。丸岡が1889年7月25日付で内務大臣・松方正義へ送った文書には、神社の改革を通じた沖縄「県」政の安定を意図していることが読み取れる。

此頃ニ至テハ人民漸琉球ハ皇国之版図タルヲ弁知スルニ至候得共此上本県ノ各府県ニ殊ナラサル所以ヲ悟ラシメ人民ノ方向ヲ確定セシメントスルニハ官国幣社一ヶ所被取設候義実ニ必要ノ事ト存候。（『波上宮誌』資料編 2016：270）

つまり、「最近では、人民もようやく琉球が皇国の版図であるとわきまえるようになったので、さらに沖縄県が他県と変わらないことを理解させ、人民の方向を確定させるためには、官国幣社を一ヶ所でも設けることが絶対に必要であろう」と説いた。沖縄にも官幣社を設置するということは、琉球国だった地が日本の一県であることを文化的・宗教的にも示す意味があった。

なぜ波上宮だったのか。同じ宮内省内事課の公文に理由が列举されている。「沖縄県には官社と称するところが8ヶ所あるが、なかでも波上宮は人民が最も尊崇するところであり、地理的にも沖縄県庁に近く、格別に風光明媚なので人々に敬神の念を喚起させ、広く尊王愛国の気風を振興させるのに最適」だと評価した。そして、「元来、貧困の土地柄なので賽納金などがいないために保全する見込みが立たない」として、「本県は万事特別の土地柄につき、相当の永続資金を下付されれば利子でもっ

て官国幣社の体面を辱めぬよう」整えることができる（『波上宮誌』資料編 2016：271）、と官費からの資金拠出を求めた。この要請から約半年の早さで、晴れて官幣小社に列格されたのである。

制度の上では、これにより沖縄の神社の日本化が始まった。官幣小社への列格を機に、波上宮は従来「大夫」という役職を「宮司」と改めた。他の神社でも役職名を改めるには、明治43年の改革まで待たねばならない。波上宮では、これまで世襲されていた社家は排除され、新たに任命された宮司のもとで新たな神道行事作法により奉仕されるようになった。また、神仏判然令を適用すべく、神社と寺をはっきりと分離し、神社にあった本尊仏を寺（護国寺）に移した。

1890年5月13日、船で御霊代みたましろを乗せた汽船が那覇に到着。知事をはじめとする県庁職員、那覇や首里の役所職員、警察署長ら、宮司のほか、数百名もの学校生徒が波止場で迎えた。小学生の軍歌や女学生の唱歌に送られながら、御霊代は県庁に奉安され、翌日、知事が御霊代を拝受した。17日の朝、御霊代は県庁を出発、警察・役人・学童や生徒たちによる大行列で波上宮まで送られ、鎮座告祭式は「未曾有の盛典」となった。官幣社の設置とは、日本の政治と宗教が結びついて沖縄へと正式に受け入れられた画期的な事件であった。

（3）「神社」文化と1910（明治43）年の改革

正式に官幣小社に列格された5月17日は、以後、波上宮の例祭「波上祭」なんみんさいと定められた。当時の報道や記録を見ると、祭りは「日本の神社の祭り」らしい趣向を凝らしている。娯楽の少なかった当時、波上祭は人々の最大の楽しみだった。那覇の寄留商人の奉納や協力により、年々その規模を拡大していったようだ。

波上祭の様子が初めて新聞に載ったのは、1898年5月19日の『琉球新報』。それまでの沖縄にはなかった神輿みこし行列が町を練り歩き、那覇市中の家々が国旗を掲げて、朝から晩まで境内には参拝者が絶えなかったという。波上宮に安置されたご神体を乗せた神輿は午前中に波上宮を出発して、夕方までかかって市内を一周するものだった。「昨年ノ通り御神輿モ渡御アラセラルル」とあるので、1897年にはすでに行われていたようだ。翌1899年5月17日付『琉球新報』の告知によれば、県下の役場と学校は休業となり、官吏と学校生徒の参拝が奨励された。中学校から軽気球が、師範学校からは緑門が奉納され、湯原で競馬が催されるなど賑わいを加えた。

それでも、1901年の祭典にあたって神輿の附属品修繕費を募集したところ、寄付者の名簿に並ぶのは本土系(8)の名前ばかりで寄付金も208円90銭にすぎない。1907年になると、寄付者名簿に地元の名前が多くなり、寄付金も2948円と大幅に増加した（『琉球新報』1907年6月6日付）。わずかな間に波上祭が、県民の祭りとなったことが分かる。1899年に競馬ずもうが、1906年には沖縄角力、翌年には爬龍船はりゅうせん、1910年には綱引きといった沖縄らしい娯楽も催されるようになった。

1910年代にもなると、市内全域でイルミネーションが施され、花火が打ち上げられ、行列の順路は造花や提灯で飾られ、万国旗のトンネルができた。花電車や緑門など、日本各地の日露戦争の戦捷パレードで流行した見せ物が波上祭にも登場している。また、1910年以来、寄留商人らによって行われた仮装行列が、琉球風ではなく、日本風に「四十七士」だったのも興味深い。

波上祭は当時の「日本の祭り」をそっくり模倣しつつ、沖縄の祭りの文化も取り入れて華やかなものだった。祭りの楽しみは、神社文化への親しみを育む。こうして明治末期には、波上宮が格別の存

在感を確立していたことが分かる。

神社文化が定着しつつあった当時、ついに沖縄の神社界にも遅ればせの改革が及んだ。

1910年、法律第59号「沖縄県諸祿処分法」が発令され、旧琉球八社のうち波上宮を除いた七社は官社から無格社となった。それまで琉球の社寺はどこも檀家や氏子といった経済的な基盤を持っていなかった。王府時代からの慣習で、社寺は国家の安泰・王家の安寧・農作物の豊穰を祈願して俸禄を受ける。一般の祈願は行われず、庶民はおそらく地域の御嶽・祈願所で祈るものだった。いきなりの「民営化」は無理と判断されての移行措置だったのだろう、琉球処分後も旧慣温存策が採られ、社寺は県庁に属して補助金を受け、僧侶神職の任命権も知事に属していた。それがついに自助努力により檀家・氏子組織を設けて維持拡張せよということになったのである。

同時に、社家の世襲制が廃止された。しかし新しく適当な人材を任用するのは困難だとして、それまでの大夫・内侍・祝部・権祝部・宮童といった名称から「社掌」「宮雇」と名称が改められただけで同じ者が継続して務め、子弟が神職に就くことも多かった。各地の拝所を祀るノロクモイやおおあも大阿母といった女性たちは、正式の神職とは認められないものの、従来どおり知事の許可のもとに職を継承することになった。ついに近代日本の神社としての改革が及んだはずであったが、実質的なところでは旧慣からの緩やかな改革に留まった。

神社は民営化され無格化されたが、拡張整備されれば村社格を認められる予定で、経過措置として神社には国債証券が一時下付された。しかし、その利子収入を経営に当てるはずだったが、利子の少なさと県財政の逼迫、氏子組織がなく民衆の信仰も薄かったため、社殿の修繕すらできず放置されたようだ。毎年の暴風雨と白蟻被害が進行し、近隣住民から崇敬されていた普天間宮と波上宮のほかはすべて、建物が倒壊して境内は荒廃した。そして、日中戦争期に沖縄県振興事業の一部として復興計画に採り上げられるまで、各社の荒廃はそのまま放置されたのであった。

例えば、琉球八社のひとつである沖宮の場合。そもそも三重城に至る長虹堤にあった神社は、1908年の那覇港築港工事により内陸の安里八幡宮の隣へ遷座させられていた。無格化されて以後、国宝にも指定された美しい本殿は荒廃して倒壊、戦災によって焼失した。境内地は戦後、アメリカの教会や公民館が建てられて、ついに戦前の面影は取り戻せなかった。

1910年の改革は神社制度史だけ見ると唐突に思えるが、当時としては自然な流れだったのだろう。官幣小社・波上宮の賑わいから、沖縄中南部では「日本の神社」文化が定着しつつあったと見ていい。波上宮をモデルに神社が自助努力できる段階に至ったと明治政府は判断した改革だったのかもしれない。だが、実際のところ、波上宮とそれ以外の神社との格差は急激に開いたのであった。

さて、その後の波上祭のこと。祭りはますます人気を博し、神輿行列も賑やかに、人々も着飾って出歩く華やかなものになった。1935年10月には4日間にわたり、300年大祭が大々的に行われた。祝部の天願筑登之親雲上（康権明）が薩摩で神道を学んで波上を再興したとされる年からちょうど300年にあたる。境内一帯から参道に奉献された300の献灯、角力大会、仮装行列などの奉納余興が行われた。さらに、14年ぶりに那覇の大綱引きを復活させ、綱引き行列には2万人もの人が参加したという。もちろん昼には花電車、夜にはイルミネーションもあった。

爆竹もあったそうだ。「ドドーンと地響きのするぐらい。鉄の筒があってね。筒の中にいっぱい火薬を入れて、大砲みたいな感じでネ」と当時は中学生だった人が証言する。「案外沖縄の人はネ、そ

ういう物音や音楽が聞こえたら、出てくるのよ。(中略) ああいう音を聞くと、血湧き胸躍るはあのようであらんさ。その気になるような気がしよった」と懐かしむ。当時の沖縄の人にとって「なんみん祭と運動会、この2つしか娯楽はない」と言い、「東風平とか大里、あの辺から歩いて見に来よったよ」とかなりの広範囲から人が集まってきた人気ぶりを語る。昭和初期の波上祭を記憶する人は多く、それは楽しいものだったようだ。

翌年、その翌年と「未曾有の賑わい」と言われる規模に成長した祭りは、しかし、1937年7月7日の盧溝橋事件を境に自粛へと転じた。官幣社列格50周年と皇紀2600年が重なった1940年の波上祭には、もうかつての賑わいはなかった。神輿行列は行われたものの、応召軍人の武運長久および傷痕軍人の平癒祈願が中心で、娯楽としての祭りはもはや許されなかった。

約4年後、続々と上陸した沖縄守備軍を人々は歓呼の声で迎えた。まだ地上戦が始まる以前、日本兵の行軍を「美しい」と見たり、遠く空爆を「花火のようだ」と喜んだりした話を、年配者からときどき聞く。首里や那覇の人にとって、それは懐かしい波上祭を想起させたのかもしれない。

(4) 大正の御造営と顕彰神社

少し時制を戻そう。波上宮以外の旧琉球八社が祿を廃止されて荒廃する一方、大正から昭和初期にかけて、新しい時代と社会にふさわしい新しい神社が求められ、相次いで創建された。

表2 大正から昭和初期にかけて新しく創建された主な神社

	創建年	鎮座地	立地	祭神	併設寺院
沖縄神社	1925	首里市(当時)	首里城内	舜天、尚円、尚敬、尚泰、源為朝	なし
宮古神社	1925	宮古島平良市	拝所	熊野三神、仲宗根豊見親他	詳雲寺(臨済)
名護城神社	1928	名護市	拝所	火の神	なし
護国神社	1936	那覇市	奥武山公園	戦没者	なし
世持神社	1937	那覇市	奥武山公園	蔡温、野国総管、儀間真常	なし

東京の明治神宮や京都の平安神宮など、廃藩置県後には各地に大きな神社が新設される動きが見られた。沖縄にも新しく「県社」の建設が企画される。「沖縄県諸祿処分法」が施行されたのと同じ1910年、県は「県社・村社建設理由書」を内務省神社局に提出した。

最大の計画は、県社・沖縄神社である。祭神を「沖縄開国の祖」とされる舜天、その父と伝承される源為朝、そして琉球王朝最後の国王である尚泰に定めて、「全県民で奉斎することは県民の心を一つにすること」と構想された。だが、この計画は明治天皇御即位50年事業のひとつと位置付けられたため、明治天皇崩御により関連事業は中止され、県社設立の案も立ち消えとなった。大正期に時の県知事・大味久五郎により再び提起され、1914年12月の県議会にて正式に県社設立が協議、翌年11月に「県社沖縄神社創立願書」を内務省に提出、1923年3月、ようやく内務省により認可された。さっそく9月に造営工事が着手され、1925年に「沖縄神社」が設立、翌年、内務省より「県社」として承認された。

設立された場所は、首里城である。廃藩置県後に荒廃しつつあった建物が利用され、旧正殿を拝殿とし、後方に本殿が造営された。さらに、約2318坪の敷地に神饌所、手水舎、鳥居、社務所が建てられた。祭神の選定については紆余曲折を経たものの、結局、当初の計画にあった源為朝・舜天・尚

泰の3神に、尚円と尚敬を加えた5神となった。

沖縄神社の拝殿となった首里城正殿は当時、老朽化が進んでいた。木造のため虫害がひどく、倒壊の危険性がある取り壊す予定だったものを、山形県出身の建築史家・伊東忠太により保存が決まった。1925年、国宝に指定され、1928年の国会で国費による解体復元工事の了承可決後、拝殿となったのである（首里城復元期成会 1993）。当時の社殿の中は白木のままで内部に仕切りがなく、拝殿正面に賽銭箱が置かれた。

例祭は毎年10月20日に行われ、前夜と当日には神式の祭典のほか、拝殿前広場で角力・銃剣術大会・琉球古典舞踊や音楽、組踊などが奉納芸能として執り行われ、県内各地からの人で賑わった。また、場外では沖縄風に首里各町の旗頭を先頭にした行列が繰り出した。「県社沖縄神社」は行政機関が推進して設立されたものながら、唯一の県社として県民に親しまれるようになった。

やがて1944年、首里城跡の下に大規模な地下壕が構築され、沖縄守備軍司令部が設けられた。司令部のすぐ上にある沖縄神社は、軍の必勝祈願などの場として活用されたが、地形が変わるほどの米軍の砲撃で跡形もなく大破された。

このほか、那覇には世持神社が創建された。遠いヨーロッパを主戦場にした第一次世界大戦（1914-18）は、日本の貿易市場や産業界に特需をもたらした。沖縄では内地の大手資本から一般県民にまで黒糖への投機が流行。沖縄経済はバブルの様相を呈した後、急激な財政破綻に陥った。世持神社の創建は、そうした沖縄産業界を背景にしている。

1933年の構想では、「産業恩人神社」の設立であった。1920年に仏教連合会が企画した、野国総管（1605年に中国から甘藷を持ち帰って全琉に普及させた人物）の謝恩碑建立と、1933年に沖縄砂糖同業組合が企画した儀間真常（沖縄に糖業の基礎を築いた人物）の謝恩碑建立が合わさり、沖縄郷土協会と県農会が参画。産業開発に功績のあった蔡温を祭神に加えて、那覇市の奥武山に祀ると決まった。神社名は琉球の古謡『おもろ』で豊年を意味する言葉「世持」にちなんで世持神社とした。神社建設のため、製糖農家をはじめ一般県民からも寄付を募り、1937年11月、鎮座祭が行われた。

仏教界や産業界で企画されて建立された神社はそれまでの沖縄にはなかった。また、実在の人物を祭神とすることに当時の内務省神社局は難色を示したが、「正三位以上にあらざる人臣を祭神とする神社は不許可の方針なるも、沖縄県の実情を斟酌し、郷社として許可すべき」と判断され、1939年3月、県内唯一の郷社に列せられた（世持神社期成会 1973）。創建にあたって、儀間・野国・蔡温の子孫である門中組織と連携し、墓前に報告するなど祖先崇拜の要素が認められる。設立後の維持費も農家に割り当てられ、農家の守り神と見なされた。従来になく郷土色の強い神社であった。

地方でも新しい神社の建設が相次いだ。宮古島には古来、波上宮より熊野三神が勧請されて、現在の平良市西里に権現堂が建立され祀られていたが、1925年1月、「宮古神社」創建が町長ほか地元有志により計画され、同年7月に



写真3 1938年の沖縄神社拝殿（首里城正殿）の様子

社殿が竣工して鎮座奉告祭が行われた。祭神は与那覇勢頭豊見親恵源（宮古開基の祖）、仲宗根豊見親玄雅（宮古中興の英主）が祀られた。沖縄本島北部でも次々と「神社」が創建された。これらは地域で崇敬されていた御嶽に神社の様式を取り入れたものだった。

Ⅲ 近代戦争と神社

（1）国家神道と護国神社

沖縄が「日本の一県」となった決定的な画期は、日露戦争だったのではないだろうか。少なくとも神社界にとってはそうである。

日本の徴兵令は1873年に敷かれたが、沖縄では遅れること25年、1898年になって施行された。1895年に日清戦争に勝利して清国の干渉が排除されたためである。宮古・八重山ではさらに遅く、1904年になって初めて施行された。日露戦争開戦の年だ。沖縄から3860人が出兵し、205人が戦没した。出征兵士・戦没兵士は称えられ、徴兵逃れは地元新聞で厳しく姓名・住所を公開された。日本人たる意識が急速に育ちつつあった。

ただ、この日本人意識を皇民化教育で強制されたものと捉えるのは正しくないだろう。長く中国の朝貢国だった琉球列島の人々にとって、「日本人」となった10数年後に清国を破り、さらに10年後にロシアと開戦した衝撃がいかばかりであったか想像してみたい。急成長する強国の一県となり、平等な一国民となることの眩しさと焦燥は、日本のどの地方よりも強かったのではないだろうか。

例えば、宮古島の5人の漁師が日本海海戦に向かうバルチック艦隊を発見して、石垣島通信所に伝えるべく^く割り舟を29時間こぎ続けた「久松五勇士」の話である。戦前は修身の教科書にも載った有名な武勇伝であるが、宮古島では110年を経た今でも銅像が残る。また、明治後半の新聞は、当時盛んに送られたブラジル移民に対して「沖縄県人の意識を捨て、大日本帝国の一員たる誇りを持て」と鼓舞した。昭和生まれの私の両親世代も、過剰なまでに「日本人」として振る舞おうと努めた。日本に同化したいと痛切に願った人々の意識を考慮せずに、当時の改革や歴史的事件を理解することはできない。

護国神社の整備もまた、こうした社会意識によって促進された。

沖縄の神社と日本の戦争の関わりも、日露戦争に始まる。1904年2月8日の開戦に少し遅れた2月16日、官幣小社波上宮は「敵国降伏、陸海遠征軍安全」を祈る臨時祭を行った（『琉球新報』1904年2月15日付）。2月27日には「宣戦の奉告祭」が勅使を迎えて行われ、市中の家々は国旗を掲げて賑わった。8月15日には、旅順占領の公報を受けて戦捷祈禱祭が行われたという。武運長久・戦捷祈願はその後も続き、1914年には第一次大戦への宣戦奉告祭が、1917年11月には入営奉告祭の記事が初めて『琉球新報』に表れる。日中戦争が始まり、太平洋戦争が始まり、神社での祭典を報じる記事は武運長久祈願の一色になった。1933年には上海事変・満州事変から凱旋した30名が暁12畳もの巨大な日の丸の旗を寄進するなど、神社にも戦時色が濃くなっていた。だが、護国神社ができるまでは、戦争に関わる祈願の中心もまた波上宮だった。

波上宮の移転計画は大正年間からあったようだ。海に面した崖の上は風害がひどいため奥武山公園内に移転する案があった（『琉球新報』1918年5月8日付）。風害だけでなく、風紀の問題もあった

ろう。波上宮の周辺は今も昔も沖縄屈指の歓楽街である。1930年には波上宮下の海岸に御大典記念事業でプールが建設されて娯楽色がますます強まり、不敬ではないかと批判された。

少なくとも戦没者を祀る場は厳粛であるべきだと考えられたのだろう。1936年、招魂社が那覇市奥武山に創建された。以後、戦捷祈願や武運長久祈願は波上宮で行い、護国神社へ足を伸ばして英霊に詣でる、という棲み分けがされたようだ。

招魂社から護国神社へと改称されたのは、1940年7月1日。内務省令告示第407号により、招魂社を改めて「沖縄縣護國神社」に指定された。9月28日には、長く教育界に勤めていた長嶺牛清が社司に就いた。長嶺は教育者らしく、後年、貴重な回想録を書いている。着任当時の様子は、「御宮ノ状況ハ実ニミスボラシイ有様」で、社務所は隣の世持神社の社務所に間借りし、本殿は建設予定で、仮本殿は木造の掘っ建ての「御粗末極マル」ものだったという。付近の小中学生が祭神も知らずに参拝することを悔しがる記述もある（長嶺1953：119, 121）。当時の祭神数は、日清戦争1柱、日露戦争195柱、満州事変27柱などの計310柱。日本各地の護国神社と比べても小規模な社だった。

その年の10月の例大祭で支那事変の戦没者46柱、1941年10月には一気に326柱が合祀された。沖縄が「近代日本の戦争」に本格的に参加するようになったことを表している。だが、その後の沖縄が被った戦災からすれば、戦争はまだ遠い対岸の火事だった。同年12月、太平洋戦争が勃発。就任まもない長嶺牛清が退任して、新しく仲村渠致権が社司に就任した。仲村渠は日中戦争で負傷して帰郷していた陸軍中尉で、在郷軍人沖縄分会の会長も務めていた。

余談ではあるが、独自の解釈による神の勧請は護国神社についても行われたらしく、現在の米軍嘉手納基地内にも「護国神社」があるという。普天満宮の新垣義夫宮司が1990年に実施した独自調査で判明した。廃藩置県後に入植した一族が豊年満作を祈願するための祠を建立し、身内から戦死者が出たので護国神社を分祀したものだそう。土地は米軍基地に接収されたが、一族は許可を得て年に2回参拝する⁽¹⁰⁾。「護国神社」と名乗るものの、御嶽や土帝君^{とつていーくー}のような祠で、集落代表の女性が拝み、ピンシーや三段重ねの餅や重箱を備える沖縄式の儀礼だそう。また、宮古島の平良下里にも「地盛嶺^{じもり}護国神社」なる「護国神社」が現存する。古い鳥居は建つが由緒は不明で、やはり戦時下に御嶽へ護国神社を勧請したものと思われる。

(2) 「一村一社」構想

1931年の満州事変の勃発から日中戦争、太平洋戦争へと戦火が拡大するにつれ、沖縄各地から青年たちが次々と徴兵されて戦地に赴いた。沖縄県は歩兵連隊が置かれなかった数少ない県である。そのため、徴兵された兵士は第6（熊本）・第12（小倉）・第18（久留米）師団と九州各地に配置された。つまり沖縄では、兵士になるとは即座に海を越えて県外へ赴くことを意味した。

出征兵士は戦捷祈願と武運長久の祈願を神社で行うのが常である。当時の常識は沖縄にも知られていた。しかし、沖縄では極端に神社が少ない。神社のない地域は、出征兵士の祈願をどのようにすればいいのか。戦没兵士をどう迎えばいいのか。それは切実な大問題となっていた。沖縄県内のすみずみまで神社を設けることは急務だと思われた。

そこでにわかに促進されたのが「一村一社」の構想である。

1910年の諸禄処分法により社寺禄がなくなり、かつての琉球八社の多くは荒廃していた。昭和初

期の段階で機能していたのは、波上宮・普天間宮・沖縄神社・護国神社の4社にすぎない。そのため、荒廃していた旧琉球八社のうちの6社を急遽「県社・郷社」とすること、さらに地域の御嶽を神社として整備して一町村に1社を速やかに実現することが提案された。

この一村一社が最初に活字に著されたのは、1940年8月27日付の『琉球新報』である。内務省神社局から講師を迎えた神道講習会の終了後、官吏や学校職員からなる受講者一同が「本県一村一社の実現促進方と琉球八社の復興促進方」について県へ意見書を上申したという短い記事だ。知事に手渡したこの意見書は、「本県に於ける神道復興の方途は一町村一社の創設、御嶽拝所の整理、旧神社の復興等種々あるべき」として、まずは長寿宮と波上宮を除いた旧琉球八社の復興は喫緊で、「以前ありし神社調査会を速かに復興」して調査したうえで御嶽の整理と正規の神社とせよ、と求めている(『琉球新報』1940年9月1日付)。

意見書に先立つ1939年、すでに県内神社の復興を目指した現状調査が行われた。しかし1910年以來の放置で荒れ果てた神社が多く、その修繕費の拠出は容易ではないとして調査会はいったん解散した。つまり、それ以前から神社の復興と御嶽の整理は課題として取り上げられていたらしい。

頓挫していた「一村一社」計画は、1943年、沖縄県が主導して動き出す。旧神祇院文書「神社復興費ニ関スル説明」からは、時局により神社が必要とされた切実さが分かる。「各町村にはほとんど神社というものがいないため、出征軍人・帰還軍人らの奉告祭、武運長久、祈願祭等の執行にも多大の支障をきたしている」と現状が報告され、官民一体となって「各町村に最小限の中心となるべき1社を速やかに建立」しようと尽力されている。波上宮を除く旧琉球八社はいずれも無格社で復興されておらず、数年来、県民が自発的「琉球八社復興奉賛会」を設置したが財政的な問題により進まない。「県民の資力極めて貧弱なると共に、従来は相当に献金を為し得たる七万余の海外県民よりの献資送金も大東亜戦下不如意の状態にある」。海外移民の送金が途絶えたため、国庫の助成を仰ごうとしたのである。4ヶ年計画で琉球八社を復興させる補助費に8万円、さしあたり1943年度の所要金額3万円が国庫の助成として申請された(『波上宮誌』資料編 1993:331-339)。

同じく1943年10月には、県知事・泉守紀から内務大臣・安藤紀三郎に宛てて「神社創立計画案」が起案された(『波上宮誌』資料編 1993:341-351)。より具体的に、従来の聖地を利用して「県社・郷社」を設立する提案である。県社としては「普天間宮・斎場神社・北山神社・宮古神社・八重山神社」の5ヶ所が構想された。ここでの斎場神社とは、今では世界遺産に指定された斎場御嶽で、北山神社とは北山王朝の今帰仁城である。これで沖縄本島の北部・中部・南部と宮古島・八重山地方にそれぞれ中心的な県社ができることになる。さらに、郷社としては浮島神社・名護神社・末吉宮が候補に挙がった。「計画案」には、各地域の御嶽の数を詳細に調査し、そのなかから神社として昇格できる御嶽の数を一覧表にまとめて添付している。御嶽は、おがみ山・ムイ(森)・グスク(城)・ウガン・オン・スクなどと呼ばれる聖地・拝所をあわせて900以上あり、そこから村社60社、末社150社に整理統合する計画だった。

実際にその当時、特に地方では、御嶽だった地に拝殿や鳥居を整えた「神社」が次々に誕生していた。糸満の「白銀堂」、佐敷の「月代宮」、宜野座村の「惣慶宮」、泡瀬神社、本部町の「新里宮」、与那国の「十山神社」、西表島の「白浜宮」などである。これらの大半は今も「神社」のまま残る。例外は観光地化された聖地である。

今帰仁城は今では世界遺産の一部として北部観光の中心をなす。「北山神社」だった頃の鳥居は、戦後しばらく残されていたが、本土復帰後、本部町で海洋博覧会が催されるにあたり「沖縄らしくない」という理由で撤去された。現在、脚の部分だけが今帰仁村歴史文化センターの前庭に移築されている。

高さ約7.5メートル、幅は最長10.6メートルにもなる大きな鳥居だったようだ。残された支柱も直径60センチと太く、裏には「奉納 大阪今泊共済会岡山支部」「昭和5年12月吉日」と彫られている。今帰仁村教育委員会が取り付けた説明板によれば、「戦前に沖縄各地のグスクが皇民化教育の一環として御嶽やグスクが神社と同一視され、鳥居が建立された歴史がある。この鳥居もこのような歴史を伝えてくれる貴重な文化財である」とのことである。

だが、もう片方の脚に取り付けた説明板には、「鳥居は、昭和5年に関西今泊岡山支部などの寄付と大勢の今泊区民が汗を流して建設したものである」とある。皇民化教育の残滓^{ざんし}を抹消したい意向と、出稼ぎ者と地域住民とが協力して建立した記憶とがせめぎ合った着地点がここで、こうして博物館前に脚だけを残す措置だったのかもしれない。



写真4 北山神社の鳥居の遺構

(3) 沖縄戦と神社の行方

神社を増やすなら、神職も必要になる。

民間の呪術者であるユタは、国民を惑わす流言蜚語^ひをなす者として厳しく取り締まれ、時には検挙されたことが新聞などで報じられた。「国家総動員法の制定された1938年にはユタ1人に賞金2円をかけて密告を奨励し、ときには一挙に二百数十人を検挙したこともあった」(『那覇市史』1974: 688)という。私は自費出版や非売品の沖縄戦体験記を好んで読むが、生き残った日本兵の手記で、「この戦争は8月で終わるとユタが予言した」という流言が沖縄戦末期に日本兵の間にまで伝わって動揺が広がった、と読んだことがある。

ユタを取り締まる一方で、ノロは神職に切り替えることが計画された。ノロは地域の御嶽で神事をつかさどってきた神女で、神職講習会に出席させることで神職として再編しようとしたのである。

講習会のことは当時の新聞にも記されている。「従来その神事を司ってきたノロらを当分は傭人^{ようじん}として用い、ついでこれを『正規の神職』に切り替えていくこととし、そのための神職候補者を町村長より推薦させ、世持神社・護国神社等において開催した神職養成講習会に参加させている」(『朝日新聞』沖縄版 1944年3月11日付)とのことであった。神職養成の中心的指導に当たったのが、誰だろう、あの鳥越憲三郎であったという。久高島の神事イザイホーの研究で知られた、沖縄宗教史や沖

縄民俗学の父である。当時はまだ 30 歳ほどの新進気鋭の若手だったはずだ。

いささか半信半疑だった知識に、思わぬところから裏付け証言が取れた。普天満宮の現宮司・新垣義夫によれば、伯父にあたる先代宮司・新垣義志^{きし}が、この講習会に参加した一人だったという。30 数人が受験して 15 人ほどが合格して神職資格を得た、「その合格ぎりぎりの最後」だと謙遜していたそう。新垣義志はもともと農家の生まれで、農業のかたわら芸能や機織りをしていた村の人気者だったが、村長に推薦されて講習に参加し、神職資格を得て普天間宮の社掌に就任した。新垣は講習に参加するうちに古事記や日本書紀といった古典の教養や知識が足りないことを心許なく思ったが、指導していた鳥越健三郎が「大丈夫だ」と太鼓判を押したそう。⁽¹²⁾

こうして、新しい「神社」と「正規の神職」は速成された。県内全域を一村一社で覆う構想は、まずは 1943 年から 1946 年までの 4 ヶ年計画とされたが、途中で挫折せざるを得なかった。戦局の悪化が予想された以上に急だったのである。

南方戦線の敗戦が濃くなるにつれ、本土防衛における沖縄県の重要性がにわかに増した。すでに 1931 年に海軍が小禄飛行場（現在の那覇空港）建設に着手して 1933 年に完成させていたが、1942 年より陸軍が飛行場建設に乗り出す。宮古・八重山・伊江島も含む 7 ヶ所をほぼ同時に着工し、北飛行場（読谷）・中飛行場（嘉手納）のほか、伊江島・徳之島・石垣島などにも建設、合わせて 15 ヶ所の飛行場が急造された。南西諸島全体の「不沈空母」化構想である。沖縄中の民間人が作業に動員された。

1944 年 3 月、沖縄に大本营直轄の第 32 軍司令部が創設され、首里に司令部が置かれた。隷下に配属された第 24 師団・第 28 師団・第 62 師団をはじめ、独立混成旅団や砲兵団などが続々と沖縄に上陸して県内各地に配置された。これらの軍施設の建設や陣地構築が急務となり、こちらにも軍官民が婦女子に至るまで一致協力して作業にあたった。もはや一村一社の整備どころではなかった。

ついに 1945 年 3 月 27 日に慶良間諸島へ、4 月 1 日には沖縄本島西海岸へ米軍が上陸。沖縄は最前線の戦場となった。

普天間宮の社掌に就任したばかりの新垣義志はご神体を担いで南へ逃げ、糸満のエージナ島に隠れた。いよいよ米軍が迫って投降を決意した際、ご神体を物陰に隠して「生き延びられたら迎えにきます」と願を掛け、持っていたサトウキビなどを一緒に潜伏していた周囲に分け与えて投降。そうして捕虜になって生き延び、戦後、ご神体を迎えにいった神社の再建を率いた。その時に食料をもらった日本兵や住民が戦後、感謝を伝えるに神社を訪れることもあったそう。⁽¹³⁾

護国神社の社司だった仲村渠致権は、在郷軍人沖縄分会の会長であり陸軍中尉でもあった。沖縄戦が始まると、やはり御霊代を担いで国頭村の山中に隠し、のちに糸満の神社職員が自宅で保管した。仲村渠は本島北部の部隊へ合流して戦い、5 月 27 日に恩納村の山中で戦死した。

波上宮は御霊代の扱いについて周到に備えていたらしい。「波上宮は十月空襲前、情勢悪化しつつある際、内務省より飛行機で帰任せる島田知事に口述を以って、不可抗力の災禍の場合は、神様は天上に御帰還を祈願し、神社御神体等は放置せよとの示達があったので十月空襲の朝その処置をとった」（『琉球新報』1952 年 6 月 14 日付）と波上宮の神職のうち唯一生き残った上原恵理^{けいり}が証言する。⁽¹⁴⁾ 安原宮司らは軍と行動を共にしたほうが得策と判断し、4 月下旬から首里の司令部付近へと移動していたが、5 月末、沖縄守備軍の首里撤退とともに南部へ避難しようとして亡くなった（『波上宮誌』

通史編 2016：410-411)。

沖縄の神社界を担ってきた神職もまた、沖縄戦で多く失われたのである。

(4) 沖縄戦による破壊？

沖縄本島の地上戦によって、神社と御嶽がいつどのように破壊され荒廃したのか。実は詳しいことはよく分かっていない。

沖縄への米軍上陸を予想した軍により、1944年夏以降、沖縄県民の県外疎開が促進され、県外に出られない老人と女子供は北部へ疎開するよう勧められた。成人男性や学生は中南部で軍と行動を共にした者も多かったが、1945年5月末の時点で生存していた者の大半は、米軍の追撃前に首里から南部へと撤退した。つまり、南部撤退する日本軍を追撃してきた米軍の主力が首里・那覇に到達した時、市街地はほとんど無人だった。敗残兵の掃討戦は6月以降の南部では熾烈^{しれつ}をきわめたが、首里・那覇では行われていない。そのためだろう、那覇に入った米兵たちが束の間の休息と異国情緒を楽しんだ様子が、膨大な米軍写真資料から窺える。写真によれば、波上宮や護国神社などの鳥居や境内地の施設はかなり残っていたようだ(写真5・6)。

「ようだ」というのは、沖縄戦終結直後の首里・那覇を目撃した者の日本語記録がほとんどないからである。捕虜になった日本兵は将校・兵卒・沖縄人・朝鮮人に分けた収容所へ送られ、民間人もいったん全員が民間人収容所に入れられた。

1945年10月頃に一部の地域と職種への帰還が許され、順次、民間人収容所からの解放が進んだが、波上宮の境内を含む那覇の旧市街地は長く米軍の管理下に置かれた。1952年秋にようやく那覇全域が解放され、上原が波上宮を参詣すると、鳥居だけ残して建築物はすべて失われていたという。⁽¹⁵⁾枕崎台風(1945年9月)とグロリア台風(1952年)の被害と推測されている(『波上宮誌』通史編2016：415-417)。

護国神社の場合、開戦まで社司だった長嶺牛清が1946年2月に田井等^{たいら}の民間人収容所を解放されて小禄村へ向かうトラックから見た時には、檜の木でできた第二鳥居が残っていたはずが、数年たって見ると影も形もなかったという。本殿・拝殿・灯籠・玉垣・参道なども破片すら残らず消えていた



写真5 アメリカ海兵隊が1945年6月15日に撮影した護国神社。拝殿の屋根に砲弾の穴が見えるが、境内地はわりに保たれている。沖縄県公文書館所蔵



写真6 1945年、那覇占領後に市内見物に出かけた海兵隊員たち。左が波上宮、右が護国寺。沖縄県公文書館所蔵

そうだ（長嶺 1953：126-127）。

米軍写真を探すと、1945 年 5 月時点では、護国神社の拝殿は屋根に砲弾の穴が空いただけで建物（16）は残り、玉垣や敷石も見える。当時、民間収容所や外地からの帰還者で沖縄全体の人口が爆発的に増加していた。住宅資材が極端に不足していたため、建築資材に使われたのかもしれない。被害は護国神社に限らず、長嶺（1953：128）は「波上宮ノ如キハ階段ヤ拝殿ノ周囲の敷石参道ノ敷石ナドガ全部ハギ取ラレ」ており、「世持神社ノ拝殿ガ納骨堂ニ早変リシテ居ルコト」を嘆いている。

いずれにせよ、沖縄本島中南部の神社の大半は、沖縄戦を機に荒廃したのである。

IV 戦後神社の復興と発展

（1）アメリカ占領下での神社復興

日本の神社界は、敗戦による制度変更を余儀なくされた。1945 年 12 月 15 日に施行された神道指令により、国家神道は廃止され、各神社は新たに交付された宗教法人令により、それぞれ別の宗教法人として再出発することとなった。

沖縄の神社の場合、敗戦の影響はさらに大きい。1951 年 9 月のサンフランシスコ講和会議により、1952 年 4 月 28 日の日本独立が決まる一方、沖縄は米軍の施政権下に残された。沖縄は本土から切り離された行政区分となって宗教法人令の適用は受けられず、神社復興どころか宗教法人としての活動すらできなくなった。キリスト教や仏教には戦前の宗教団体法が適用されて宗教法人として維持運営ができたが、沖縄の神社は「社団法人」として活動せざるを得なくなった。

そのため、神社復興は民間からの支援に頼るしかなかった。1950 年、ハワイ在住の沖縄系移民が沖縄を訪問し、米軍の許可を得て波上宮に立ち入り、その状態に心を痛めた。ハワイに戻った後、物質的援助だけでなく精神的にも立ち直る援助が必要だ、とハワイ在住の沖縄出身者で組織する「うるま一心婦人会」が中心となり、沖縄の神社仏閣復興基金を募った。1953 年 4 月、婦人会の代表 3 氏が集まった 9000 ドルの寄付金を持って来訪、県内の神社仏閣に配分されることになった。『沖縄タイムス』（1953 年 5 月 7 日付）によれば、波上宮はこのうち 2000 ドルを受けて、さっそく 5 月の例祭で地鎮祭を執り行い、工事に着手している。

普天間宮には 1500 ドルが寄せられた。以前からペルーやブラジルなど沖縄系の南米移民に寄付を募っており、地元の普天間や宜野湾のほか、那覇の篤志家の呼びかけにより財界人から大口の寄付も集まった。普天間宮への復興支援金は、宜野湾全体の復興予算よりはるかに多かったそう（17）だ。

それら寄付金を財源として復興期成会を創設し、波上宮・普天間宮はいち早く 1953 年に仮社殿を建立。さらに全国の神社界からの募金や東京の県人会の協力もあわせて、普天間宮は 1961 年に現在の拝殿を完成させた。1963 年 5 月 8 日に撮影された写真 8 を見ると、周辺環境は現在と違って米軍向け歓楽街の趣だが、神社の外観は現在までほとんど変わらない。

再建された当時の波上宮の写真も、やはり現在まで変わらない（写真 9）。手前に見える景観はこの 50 年でめまぐるしく変わった。左の建物は当時まだ米軍専用の保養施設で、後に「水上店舗」という県民にも開放された商業施設となった。今では建物はなくなり地元向けのビーチが整えられ、手前には海の上をバイパス道路が通っている。神社の景観が 50 年変わらないのは、内地では当たり前



写真7 1954年7月20日、アメリカ陸軍が撮影した再建されたばかりの普天間宮。沖縄県公文書館所蔵



写真8 琉球政府関係写真資料より「あの町この村 宜野湾市 普天間」。沖縄県公文書館所蔵

のこともかもしれないが、沖縄では貴重なことだ。

護国神社の復興はさらに困難だった。仮社殿が造営されたのは、少し遅れた1959年4月25日、翌26日に全戦没者を合祀する第1回春季例大祭を執り行った。その時の御祭神の数は9万3446柱で、沖縄戦で亡くなった民間人も含んでいる。さらに同年11月15日の第1回秋季例大祭では、「沖縄戦で戦没した本土出身者」6万5717柱も合祀した。一般に護国神社というものは郷土出身の戦没兵士のみを祀る。民間人も他県出身者と一緒に祀るのは、きわめて異例のことだった。当時、アメリカ占領下⁽¹⁸⁾にあって日本の神社界と切り離されていたからこそ実現した独自路線である。

次々と神社の復興が実現した1950年代半ばは、戦後の混乱から人々の生活が立ち直り始めた時期である。戦没者の遺骨収集や慰霊事業により本格的に取り組めるようになり、県外の遺族団体や自治体からの訪問や慰霊事業が盛んになってきた。サンフランシスコ講和条約の発効（1952年）で日本が独立して南西諸島が切り離され、翌年、奄美の復帰運動が奏功してアメリカ占領下を脱した（1953年）。沖縄での神社の再建とは単なる宗教文化の復興ではなく、日本への渴望であり、祖国復帰運動の象徴という役割も果たしていた。

それでも、再建できた神社と、できなかった神社がある。戦前には227社⁽¹⁹⁾もあったといわれるが、旧琉球八社や戦前まで規模が大きかった神社のうちでも、小規模ながら地域住民によって再建できた神社もあれば、復興できないままの神社もある。この違いは何によるのか。

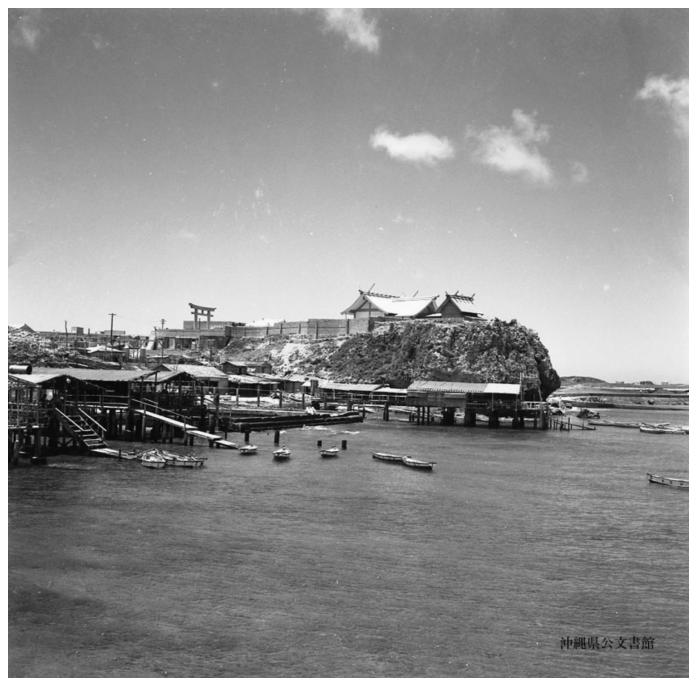


写真9 琉球政府関係写真資料より。1963年7月に撮影された波上宮。沖縄県公文書館所蔵

表3 旧琉球八社と旧県社のうち復興した神社としなかった神社

	復興年	復興基盤	鎮座地		復興年	復興基盤	鎮座地
波上宮	1953	ハワイ・本土県人	旧地	宮古神社	1980	復興期成会	旧地
普天満宮	1953	ハワイ県人会	旧地	住吉神社	1982	地域住民	近隣へ遷座
護国神社	1959	復興期成会	旧地	安里八幡宮	1993	地域住民	旧地
識名宮	1968	奉賛会（地域住民）	旧地	世持神社	—	社殿御造営奉賛会	波上宮（仮宮）
末吉宮	1972	那覇市（文化財として）	旧地	沖縄神社	—	再建期成会	弁ヶ嶽（小祠）
天久宮	1973	復興奉賛会（神託）	旧地の一部	浮島神社	—	奉賛会	波上宮（仮宮）
沖宮	1975	復興奉賛会（神託）	奥武山へ遷座	金武宮	—	—	旧地

最大の違いは、地元の人にとって信仰の基盤があるかないかではないか。旧琉球八社はすでに述べたように、古くから御嶽として信仰されてきた地にある。神社の「形」が整えられた後でも、地元の人にとっては「立派に整備された御嶽」のように親しい信仰の場としてあり続けた。

例えば、1948年にアメリカ空軍が撮影した「普天間神宮の洞穴で祈りをささげる老女」の写真が公文書館に所蔵されている（写真10）。写真はあきらかに撮影用にポーズを取らせたものと思われるが、添付されたキャプションによれば、通訳に対して女性は、週に1度は洞穴に通ってきて御願^{うがん}を捧げていると説明したそうだ。神社としての社殿が失われた後も、聖地として拝み続けた人々の強い思いがあってこそ社殿の復興も実現したのだろう。

復興できなかった神社は、例えば沖縄神社や世持神社である。いずれも戦災に遭うまでは、今からは考えられない規模の大きな神社だったはずだが、地域の信仰を集めることがなかったためか、神社として復興することはできなかった。

首里城跡に建てられた沖縄神社は、戦争で跡形もなく大破した。沖縄守備軍が首里城の地下に巨大な司令部壕を設けたため、地形が変わるほどの爆撃を受けたからである。1950年、同地にはアメリカ軍政府教育部の指令によって琉球大学が新設された。1960年に沖縄神社再建運動が起きたが、琉球大学が土地の返還を拒否したため、首里城のすぐ東に位置する標高166メートルの弁ヶ嶽に小さな祠で再建された。1973年に宗教法人格を取得。波上宮が管理と祭典運営を担い、毎年10月20日に東京から尚家の代表者が参列してひっそりと例祭を行ってきた（写真11）。

現在、この地域には那覇市の「歴史的な稜線と緑」の景観を作る公園整備計画が持ち上がり、沖縄神社には移転が求められている。「歴史的な祭祀空間」として崎山御嶽や雨乞御嶽はそのまま保全される予定だが、かつての県社だった沖縄神社はその対象とはならないよう⁽²⁰⁾だ。

戦災前とは異なる神社へ生まれ変わりながら名前だけ引き継がれた神社もある。

これには比嘉真忠^{しんちゅう}（1914-1990）の活動によるところが大きい⁽²¹⁾。比嘉は、住吉神社を琉球に勧請した儀間真常の一族であるという。戦前は機械関係の仕事をし、戦時中は軍に徴用された。戦後は、おそらく米軍に出入りするトラックであろう、運送業を手掛けて財を成した。そして、1953年、41歳の時、突如ご神託があったとして天燈山御嶽^{てんとうざん}（現在の沖宮本殿の上にある丘）へ日参するようになる。比嘉のもとへ続々とユタの女性たちが集まってくるようになった。1955年頃、「沖宮を復興せよ」との啓示を受け、沖宮復興期成会を設立。沖宮はかつて長虹堤にあったが、築港工事により安里へ移されたまま荒廃して戦災で焼失していた。そのご神体だった霊石がもともと浮いていた場所だと



写真10 米空軍コレクションから。普天間の洞窟で祈りを捧げる女性。沖縄県公文書館所蔵

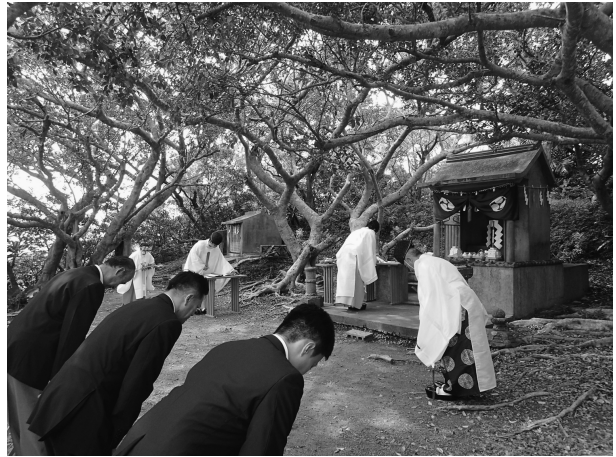


写真11 2017年10月に行われた例祭の様子。左が尚家の代表者、その右が筆者。祠の脇の灯籠は倒壊したまま修復されておらず、道路に面した鳥居も折れたまま再建されていない。

して天燈山御嶽の近くに仮宮を設置したのが現在の「沖宮」の始まりである。

このほか、琉球八社のひとつだった天久宮も、昭和になって「産業恩人神社」として構想された世持神社も、比嘉真忠が受けた神託によって「再建」された。

世持神社も奥武山公園の中にあり、建立当時から残る大きな鳥居と新しい小さな祠とが建ち、沖宮の神職や信者が日供祭を毎日行っている。だが、祀られているのは元の世持神社の神ではなく、比嘉が定めた土地の神である。神社としての登録もされていないため、厳密な意味では神社とは数えられていない。天久宮のほうも、やはり元の場所とは異なる場所に建てた小社で、こちらは現在、沖宮にいた神職が何人か奉仕している。

比嘉真忠も沖宮の神職たちも、元は沖縄流の信仰を担うユタとして活動し、後に日本式神道の正式な神職資格を得て神主となった人々である。なぜか。それは、沖縄の本土復帰による急激な日本化によって生じた逆説であった。

(2) 復帰後、沖縄「県」の神社

沖縄の本土復帰が決定して施行されるまでの短い期間で、沖縄の政治・司法・経済・文化などありとあらゆる分野において、制度や習慣の「日本化」が急がれた。復帰した沖縄に本土法をどう適用するか、組織や資格をどう引き継ぐか、水準の違いをどう補整するか。1970年より復帰対策特別委員会が設けられて「復帰対策要綱」がまとめられ、具体的な施策が準備された。神社界も同じだった。まずは沖縄の神社を本土と同じ宗教法人にすることが最初の課題となった。

「沖縄の神社」を「日本の神社」に切り替えるのは実はそう単純な手続きではなく、文化庁宗務課や神社本庁は取り扱いについて協議を重ねたようだ。当初の政府の考えでは、宗教団体の適用を受けている団体のみを宗教法人に切り替える方針だったが、それでは神社が該当しない。沖縄では神社はすべて社団法人として運営していたため、復帰と同時に取り潰しになる恐れもあった。神社本庁が文化庁宗務課や沖縄北方対策庁に強く申し入れて、「琉球政府が保管する神社明細帳に記載されている神社」も宗教法人の認証を受けられることになった。だが、当の「沖縄県神社明細帳」が戦争で焼失

して現存しない。結局、神社本庁が復元を行い、ようやく沖縄の神社も晴れて宗教法人へと移行することができたのである。

次に「神職」不足の問題があった。復帰を目前に控えた沖縄には、沖縄戦を生き延びた神職のほか、本土から赴任した者、本土で神職資格を得た者を合わせても5名しかいなかった。これでは沖縄県神社庁の包括神社10社（遅れて宮古神社が承認され、包括外に沖縄県護国神社）のすべては運営できない。神社本庁は急遽、特別に神職養成講習会を催して単位を取得させることで有資格者の確保を図った。1971年12月から15日間、1972年2月26日から5日間の2回にわたり「神職養成講習会」が行われ、講習を修了した全員が位階を取得して正式な神職となった。

「すでに神職資格のあった5人」には、沖宮の比嘉真忠も含まれる。比嘉はすでに1966年、國學院大学の神職養成講習会を受講して神職資格「直階」を取得していたため、この1972年の講習会を受講して「権正階」を取得し、正式に宮司に就任できることになった。

『沖縄縣神社庁誌』（1992）の口絵には、この1972年講習会の修了記念写真が載っている。女性が半数を占めるのが目を引くが、ユタとして活動していた沖宮関係者が多かったようだ。講習中の苦勞を、祝詞・祭式を教えた小野迪夫（小石川大神宮宮司）が書き残している。受講生から「先生のうしろに白い着物を着た神さまがおられる。先生の講義はその神様のご意思です」と言われ、どうやら複数の女性に見えていた様子だったとか。試験中に女性が震えだし「目は宙を見つめ、口からは泡を吹いている。他の女性たちは、また始まったかというような顔をして知らんふりをしている」という事件が起き、背中を叩いて我に返らせたこともあったという（『沖縄縣神社庁誌』1992：72-73）。

私に神社の仕事を教えてくれた又吉宮司もこの時に資格を得た一人で、当時の思い出を聞いたことがある。講習会中に神懸かりする人が続出し、「神さまは違うと言っている」と講師に反論し始める人、自分の神様と会話を始める人、ふらりと席を立て出て行く人が後を絶たず、大変だったそうだ。それでも修了した全員に資格が付与されて、一度に多くの「日本の神職」が誕生した。

本土復帰でもまた、沖縄の神社制度を日本化するための措置により、かえって沖縄的なものが正統性を獲得することになったのである。

（3） 現代「沖縄の神社」の行方

1972年5月15日の本土復帰後、沖縄の神社は本土の神社との関係が強化された。私が奉職する沖縄県護国神社は例外だが、神職が常駐する神社の大半は沖縄県神社庁に属し、神社本庁に包括されている。護国神社も全国護国神社会には加入し、全国熊野会や全国一宮会に加入する神社もある。

そうした関係から、日本全国の神社と同様、保守層の拠り所としての役割を担い、皇室への窓口のような機能を果たす。皇居勤労奉仕にも参内し、行幸の奉迎活動の先頭にも立つ。地元政財界との繋がりも強く、保守層の集会などが開催される場にもなっている。県外から正式参拝を受けることも多く、護国神社の場合は全国から戦没者遺族が訪れる。

日本の神社で一般的な祭典や行事もみるみる広まり、今ではすっかり定着した。

私が幼かった頃、正月の神社は閑散としていた。初詣をするという習慣が沖縄にはなかったのである。そもそも沖縄の正月は旧暦で祝うことも多く、お盆は今も旧暦のままだ。護国神社では先代の事務局長（父）が、戦没者の33回忌までは「遺族の神社」であらうと望んだので、その翌年から「お

正月は初詣へ」とラジオやテレビで宣伝を始めた。県内で最初の試みだったためずいぶん^{ひんしゅく}響きを買ったそうだが、みるみる参拝者が増えたのを見て他社も追随した。今では沖縄にも初詣という習慣がすっかり根付いている。

子供の成長の節目ごとに神社に参拝する、戌の日・初宮参り・七五三なども沖縄にはなかった。復帰後、本土からの生活情報が入るようになり、次第に定着してきた。厄除け祈願、地鎮祭、選挙やスポーツの必勝祈願など、一年中とぎれることなく依頼をいただく。「沖縄の神社」は、ごく一般的な「日本の神社」として同化しつつあるのだろうか。

だが、実のところ、三大神社と呼ばれる大手でさえ民間信仰を受け継ぐ場として機能している。

厄除け祈願では、日本で知られる厄年のほか、沖縄では干支の年ごとに厄年がくると考えられている。家内安全祈願として、ユタと同じような屋敷^{うがん}敷祈願を依頼される。これらは県内どこ神社も同じだろう。

普天満宮のように古くからの洞窟信仰の聖地だった神社は、今も伝統祭祀の場となることがある。実際、普天満の祭神には熊野三神や天照大神のほか、琉球古神道の神々であるニライカナイ神や火の神も祀られる。旧暦2・3・4・5月は御嶽祭祀におけるウマチー（豊穰豊作祈願・感謝祭）で、ピンシーを持参したノロが集まって祭祀を取り仕切り、神職は後ろから見ているだけだ。また、波上宮・普天満宮ともに神懸かりしたユタの修行者が訪れる。

護国神社は創建時期が新しく、古来の信仰と関わりがないはずだが、それでも「神社の業務」外の相談や依頼がある。「黒い影が見える」、「霊の声が聞こえる」、「戦跡を観光したら、戦没者が憑いてきた」、「心霊写真を処分してほしい」、「沖縄で拾った石が帰りがっている」などなど。ユタから紹介された人も来れば、ユタを紹介してほしいと来る人もいる。ユタと神職、御嶽と神社の区別をしていないと思われる相談も多い。

神社の「御嶽」要素は、首里・那覇から離れた地域のほうが強く残る。例えば、21世紀になっても久米島の君南風^{ちんぺーとうんち}殿内で「雨乞い」⁽²²⁾が行われた。町長や役場の人も揃って参加したことが『琉球新報』（2013年8月11日）に報じられている。

補足すると、「君南風」^{ちんぺー}とは久米島に特有の制度で、沖縄本島のノロよりも格上の神女である。1500年、琉球王府による八重山討伐の際、久米島の神女・君南風を戦捷祈願に同行させて効力があつたとして特別に任命されるようになり、現在も久米島の神女だけは特別に「君南風」と称する。昭和初期、君南風殿内も「神社」を名乗るようになり、今も境内には鳥居・参道・拝殿・手水舎などが一通り備わっている。

雨乞い儀式的驚くべき様子を、『琉球新報』（2013年8月12日付）の記事は淡々と報じる。

久米島で15年ぶりとなる「雨乞い^{うがん}御願祭」が11日、同町仲地の「君南風殿内」で開かれ、平良朝幸町長をはじめ町民ら約150人が降雨を祈願した。

町役場によると久米島では7月以降、雨が全く降っていなかった。（中略）君南風の嶋袋訓子さんが首里弁ヶ嶽へのお通しや雨乞い御願を行った後、雨乞い石の周囲を左回りしながら石に水を掛けた。君南風殿内前の道路で参加者が水を掛け合いながら綱引きをして、雨降りを祈った。その後、空港近くのシュケツ御嶽とシライミ御嶽で雨乞い祈願を行った。シライミ御嶽での御願

に合わせて、空港近くのハンニー崎にある寄り石でわらを燃やして雨を促した。

シライミ御嶽での雨乞い祈願のころから雲が広がり、一時的に強い雨が降りだしたほか、上空に竜巻のような渦も見られた。

いささか自慢めくが、私には各種の祭典や慰霊祭で指名されての依頼が少なからずある。私自身は祭りに夢中で分からないが、祝詞や警蹕^{けいひつ}と同時に突風が吹いたり雷が鳴ったりする、という評判があるそうだ。君南風のような由緒ある神女ではなく、国家神道の流れを汲む神社の一神職にさえ、超自然的な力が期待されていることの現れだと理解している。

沖縄の神社は今も、御嶽の機能が期待されているし、御嶽の役割を担っていてもいる。おそらく沖縄では、神社信仰の根本のところが御嶽信仰や民間霊能力者への畏怖の念によって支えられている。こうした神社のあり方は内地とはかなり性質が異なる、沖縄らしいあり方ではないだろうか。

(4) 「御嶽の神社化」再考

「沖縄の在来信仰は、外来の神社神道によって圧迫され衰退させられた」という文脈で捉えるのは正しくない、と私は考える。確かに鳥居を建てて神社の体裁をなすようになった御嶽は「神社化」して見える。しかし、内面的に見た時、沖縄の神社には御嶽の要素がぬぐいがたく残る。むしろ、御嶽あつての神社であり、「御嶽としての神社」ではないか。

逆に、「神社化」が御嶽を守ってきた側面も見過ごせない。

神社は歴史的に、神という不在の存在を暗示するための「形」を整え、洗練させてきた。参道、鳥居、手水舎、拝殿、注連縄、御鏡などは、そこが外部とは異なる空間であることを幾重もの結界を設けることで示す。神社や神道について何の予備知識がなくとも、そこが特別な聖域であることが伝わる。



写真 12 1945 年 6 月、那覇市内の鳥居の前でキリストの肖像を掲げる米兵。沖縄県公文書館所蔵

る。沖縄戦で市街地や集落を破壊しながら進撃してきた米軍すら、那覇や首里の寺社には手をつけなかった。むしろ興味や畏怖の対象でもあったらしい。米軍カメラマンが撮影した膨大な写真資料がそのことを物語る。神社という「形」が、信仰の場を守ったのである。

伝統的な御嶽は、聖域を示すことをしない。あえて何も置かない空間の霊性を、地域の人々が感じて、伝えて、守ってきた。御嶽には、伝承された読解力が必要となる。伝えられていない人の目には、そこは空き地でしかない。記録にはないが、おそらく沖縄戦で失われ、そのまま忘れられた御嶽も多かったろう。さらに復帰後、幾度にもわたる沖縄ブームや東日本大震災により、沖縄への移住者は増え続けている。地元の人が決して住居にしなかった御嶽周辺も次々と宅地開発され、本来は地権者がいないはずの御嶽までがいつの

間にか登記され、新しい地権者が開発に乗り出す。御嶽だった場所がゴミ置き場となることすらある。

「御嶽の神社化」は伝統的な信仰の破壊と変容だと批判されがちだが、神道の様式を取り入れて神社化した御嶽では、御嶽の伝統的信仰そのものが守られることもある。鳥居の中にゴミを投棄する者はない。本殿がある玉垣の内部は、宅地開発されない。神社の外観を備えつつも実質的には御嶽として機能することで、在来信仰が守られた例も少なくない。

日中戦争にともなう「一村一社構想」は挫折したが、県内各地の御嶽は鳥居を建てて「神社」や「宮」へと名を改めた。村の青年たちはそこで武運長久を祈ってから出征、あるいは出稼ぎや海外移民へと旅立った。その記憶が残された場所は、敗戦後、アメリカ占領下でも本土復帰後でも変わることなく、地元の大切な「神社」として守られてきた。御嶽だった場所にせよ、近代以降に新設された神社にせよ、信仰の場を示す「形」があったからこそ、伝統的信仰と郷土史を伝える手掛かりが残されたのではないだろうか。

おわりに

2018年2月、休日に名護城神社を訪れた。

「神社」と称されているものの、沖縄県神社庁には加入しておらず神職もいないので、厳密に言えば、神社ではない。だから、私はかれこれ20年以上も沖縄で神職を務めながら、職務上で関わったことは一度もなかった。県内屈指の寒緋桜の名所としか知らなかったが、地元では崇敬を集める「神社」らしい。近年、インターネット上にさまざまな個人や団体が、日本各地の「神社」情報をまとめている。それらで「沖縄北部最大の神社」と紹介されるのを目にして、最近では観光客が参拝することも増えたようだ。調査してみる必要があると考えた。

由緒によれば、名護城は「名護人発祥の地」という。14世紀の初め頃、琉球の三国時代に、北山統の名護按司（領主）が今帰仁から分かれて山上に城を構えた。周辺の丘陵地帯に領民が住んでいたが、約200年後、尚真王の中央集権により按司の一族は首里へ移り、領民は平地に移住した。そうして現在の名護の集落が形成され、城跡には氏神が祀られた。今も火の神がご神体で、境内にはノロの住居跡や神アシャギ（神が降臨できるよう壁がなく屋根と柱だけの建物）、拝所が残る。いち早く御嶽を神社に整備した、一村一社構想の手本のような「神社」である。

沖縄には珍しい長い階段の両側には、かなり古い灯籠が等間隔で置かれ、桜の並木が続く。沖縄のどこよりも神社らしい参道だ。階段をのぼりきったところに、「昭和3年創建」と刻まれた石造りの古い鳥居が建っていた。この参道と桜並木は、地元の青年会が同じ年に整えたそう。鳥居の下まで来ると、神アシャギのような造りの簡素な拝殿が見えた。拝殿前で手を合わせてから後ろに回り込むと、



写真13 名護城神社の鳥居と拝殿



写真 14 名護城神社の本殿

本殿の役割を果たす小さな祠があった。いずれも古くて趣のある建物だ。

初老の男性が一人、黙々と帚^{ほうき}で落ち葉を掃いていた。塵取りを支える手助けをしたのをきっかけに、男性と少し話をした。「ここは良いところでしょう。パワースポットというのでしょうか、良い気分になります。あの木のところに神様がいます。本殿の上に白い人が見えた人もいますよ」男性は誇らしげに祠を仰いだ。

沖縄で神職をしていると霊能力者と思われるらしく、「見えるのですか？」と尋ねられることが多い。だから私も、さりげなく男性に尋ねてみた。男性はきっぱりと、「いえ、私は見えません。でも、感じます。感じなければ、こうして掃除もできません」と言い切った。

聞けば、清掃はボランティアだという。神社を維持するための団体があるわけではなく、近隣の住民で都合がつく人が掃除に来る。社務所もないので、強いて言えば「ふもとの公民館が神社のお世話をする」という感覚だそうだ。「ユタなんかが拝みをして、いろいろ散らかしていきますからね。時間ができたら見に来て、こうして掃除をします。神聖な神社を汚されるのが嫌ですから」

その純粋な崇敬の念に、私は深く感じ入った。その様子を見て男性は親切に、名護には合わせて「5つの神社」があると教えてくれた。特に薦められた護佐喜宮^{ごさきみや}へとありがたく足を伸ばす。小山の中腹に建つ拝殿まで階段が整えられていたが、「昭和4年」と刻まれた古い石の鳥居の下には、鮮やかな色のビニールシートがアーケードを形成していて驚かされた。本殿の柱には「家庭安寧」「子孫繁栄」などの紙がじかに貼りつけられ、本殿の額はよく見ると電飾看板だ。それでも、本殿は神アシャギの造りで壁がなく、香炉が置かれる。奥に本殿があるがご神体は山そのものだそうで、御嶽の様式を残す。そして、やはり綺麗に掃除が行き届いていて、集落で大切にされてきた場であることが窺

えた。

沖縄の神社は、沖縄の歴史を映す。

沖縄そのものが近現代史の波に翻弄されてきた。大貿易時代、薩摩支配、琉球処分、近代戦争と皇民化、沖縄戦、アメリカ統治、再び日本の行政下へ。信仰とは、生活と文化と政治が重なり合う領域である。「沖縄の神社」はたくましく波を乗り越え、在来信仰の要素を受け継



写真 15 護佐喜宮の鳥居と、下にわたされたビニール製のアーケード

ぎつつ、外部から来た要素を取り入れてきた。

それは、神社の内部に視点を置く私からすれば、「御嶽の神社化」ではなく、むしろ「神社の御嶽化」だ。御嶽と受け容れられたからこそ存続できて、神社の形だからこそ存続できた信仰のあり方。もしかすると「沖縄の神社」とは、「琉球諸島にある日本の神社」を意味するのではなく、「沖縄の神社」という独自の信仰の形へと生成したものなのかもしれない。

注

- (1) このうち金武宮だけは社殿を持たない洞窟の中の祠で、観音寺の僧侶が管理していたため、厳密には神社とはいえないと解釈して「七社」と称することもある。
- (2) 表のなかの鎮座地は現在の行政区を、立地は田邊・巖谷（1937）から創建当時の状態と推測できる地理的特徴を記載した。
- (3) 1603年から1606年頃まで琉球に滞在した浄土宗の僧・袋中が記した書物。完成した年は1605年とも1608年とも言われるが、薩摩の琉球侵攻（1609年）直前の信仰や風俗が記録された貴重な資料である。第5巻に当時の琉球の神道について著されている。
- (4) 戦捷祈願の八幡宮はともかく、工事の竣工に天照大神を祀るのは奇妙に思われる。だが、天満宮（現・那覇市久米）が学問の神であるはずの菅原道真を航海安全の神として祀るなど、沖縄では「日本の強力な神」が独自の解釈により勧請されることがあった。
- (5) むろん葛飾北斎が琉球を訪れたことはなく、1757年に中国で刊行されて1831年に徳川幕府からも刊行された『琉球国志略』の挿絵を見て描かれたと言われる。琉球の風景でありながら、遠くに富士山が見えたり雪が積もっていたりする。
- (6) 康姓家譜の記述による。『沖縄県神社庁史』（沖縄県神社庁1992：22）
- (7) 『波上宮誌』資料編（2016：269）より、内務大臣・山形有朋から宮内大臣・土方久元宛の公文。
- (8) 寄付者名簿は、『琉球新報』1901年5月17日、6月11日、6月21日付記事より。波上祭祭典決算報告は、『琉球新報』1901年7月5日付。
- (9) 『波上宮誌』通史編：487-490。沖縄芸能協会会長でもある崎間麗進へのインタビューより。
- (10) 新垣義夫への聞き取り、2018年2月20日。
- (11) 新垣義夫らが1990年9月9日に現地調査した報告書（未公開資料）。
- (12) 新垣義夫宮司への聞き取り、2018年4月19日。
- (13) 新垣義夫宮司への聞き取り、2018年2月20日。
- (14) 沖縄戦当時は^{ねぎ}禰宜。戦後、波上宮の初代宮司や沖縄神社庁の初代庁長を務め、沖縄神道の復興を担った。
- (15) 終戦直後の沖縄には正式な観測記録が残っていないが、米軍の記録などから史上最大規模の超大型台風であったと推測されている。
- (16) 護国神社の境内地はその後、米軍の港湾施設労働者の宿舎に用いられ、実験的な設備を備えた村が新設されるなどした。詳しくは、宮武（2016：179-180）参照。
- (17) 2018年2月20日、新垣義夫宮司への聞き取り。
- (18) こうした運営方針には、党派を超えて協力した沖縄の政財界や教育界の意向が強く影響した。祭神の範囲拡大は、沖縄戦による本土との関係性を表現しようとしていた。詳しくは、（宮武2016）。
- (19) 前沖縄県神社庁庁長・末安大孝による本土復帰20周年の記念誌への寄稿より。『沖縄県神社庁誌 設立20年史』1992：79。
- (20) 「那覇市景観計画」2011年、第4章。那覇市ホームページ（最終閲覧日：2018年5月17日）
<http://www.city.naha.okinawa.jp/kakuka/tokei/keikangyousei.html>
- (21) 比嘉真忠については、私が修士論文「沖縄の神社と神職に関する一考察」執筆のため1998年頃に行っ

た津嘉山慶子氏（比嘉の愛弟子で沖宮の現宮司）への聞き取り調査による。

- (22) 古くは沖縄のどの神社でも行われていたのだろう。日露戦争で臨時の奉告祭や戦捷祈禱祭がさかんに催行されていた1904年の波上宮でも雨乞祈禱の記録がある。中央から派遣された県知事・奈良原繁男爵は、陸海遠征軍安全祈禱祭の時と同額の5円に歌を添えて奉納した。『琉球新報』1904年10月29日付。

参考文献

- 伊波普猷 1975 「中学時代の思出」『伊波普猷全集』第7巻：pp. 357-377、東京：平凡社（初出は1926年）
- 沖縄県護国神社 2000 『沖縄県護国神社の歩み』沖縄：沖縄県護国神社
- 沖縄県神社庁 1992 『沖縄県神社庁誌 設立二十年史』沖縄：沖縄県神社庁
- 沖縄県文化振興会史料編集室 2011 『沖縄県史』各論編 第5巻「近代」、沖縄：沖縄県教育委員会
- 加治順人 2000 『沖縄の神社』沖縄：ひるぎ社
- 阪本是丸（責任編集） 2016 『昭和前期の神道と社会』東京：弘文堂
- 首里城復元期成会編 1993 『甦る首里城 歴史と復元』沖縄：首里城復元期成会
- 田邊泰・巖谷不二雄 1972 『琉球建築』（改訂版：初出は1937）東京：座右宝刊行会
- 長嶺牛清 2000 「護国神社の今昔と将来」『沖縄県護国神社のあゆみ』pp. 119-128（初出は1953年）
- 那覇市文化振興課市史資料室 1974 『那覇市史〈通史篇 第2巻〉近代史』、沖縄：那覇市役所
- 波上宮神社史編纂委員編 2015 『波名城 波上宮誌』通史編、沖縄：波上宮
- 波上宮神社史編纂委員編 2016 『波名城 波上宮誌』資料編、沖縄：波上宮
- 宮家準 1972 「沖縄における諸宗教の伝播と受容」九学会連合編『人間科学』第24集
- 宮家準 1996 『熊野修験』東京：吉川弘文館（日本歴史叢書48）
- 宮古島市史編さん委員会 2012 『宮古島市史 第一巻 通史編』沖縄：宮古島市教育委員会
- 宮武実知子 2016 「沖縄の護国神社」、『アステイオン』（84）：pp. 176-195、東京：CCCメディアハウス
- 世持神社期成会編 1973 『産業三大恩人御事蹟』沖縄：世持神社期成会